

表紙, 目次, 雑纂, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38632

明治三十七年十一月十二日發行

十全會雜誌

全澤醫齒學專門學校十全會

第三十五號



(非賣品)

十全會雜誌第三十五號目次

○原著及實驗.....一頁

○子宮筋腫ト子宮病癰腫トノ統

計的比較第一回調査報告
特別會員 小川勝陳
特別會員 八田智証 共述

○糖尿鑑識ノ一法タル Phenyl-
Hydrachinprobe. (承前)

特別會員 島田吉三郎
特別會員 本田三郎

○鼻病ヲ論ズ (承前)

特別會員 本田三郎
五五頁

○雜纂

○肝硬變症ニ併發セル慢性赤痢ノ一例..... 醫科四年生 酒井利勝

○漫錄

○Aus Molkes Lehan..... S. W. 六二頁

○中學に在る友に送る歌..... 醫科一年生 伊藤哲一

○草枕(其一)..... 林秋峰

○雨絃風箏..... 釣雪生

○會報

○本會役員 ○新入生諸君を迎ふ ○入學式と入學生 ○級長囑托 ○本學年度幹生 ○叙任及辭令 ○會員動靜 ○佐々木教授の歐行 ○勸語捧讀式 ○解剖實習開始 ○醫學科第一年級々會 ○小原芳雄、上野忠、佐々木巽の三君を送る ○雜

六八頁

○通信

○佐々木教授の通信..... 金子教授の通信

○葉書通信第一回 竹中繁次郎..... 木下克雄君の通信第一

○木下克雄君の通信第二..... 田中正一君の通信

○田中一次郎君の通信..... 渡邊十治君の私信

○在戦地會員羽田信次君通信..... 山田義治通信

○文部省訓令第八號 ○文部省令第十八號

○公文

九八頁

○寄贈及交換雜誌書目 ○十全會々費領収 ○軍資金献納者人名 ○献金に對する感狀

○廣告

○小西前講師紀念品贈呈決算報告、其他數件



本 號 正 誤

頁	行	誤	正
八	一	性不明ノ下	「十二人」ヲ脱ス
全	一七	Michels	Michel
一〇	七	九百二十五人ノ下	「中」ヲ脱ス
一三	一六	漸次遞減スルノ下	「ノ傾アル」ヲ脱ス
一六	六	1.35	1.39
一七	四	Gusserow氏ノ四、五ノ下	「Hofmeier氏ノ五、二」ヲ脱ス
全	八	Seanzoni	Seanzoni
全	一八	Beizel	Beizel
一八	二	糖廬ノ五、二九兒	糖廬ノ五、二八兒
頁		誤	正
八五		三十七年度十全會 収支豫算書ノ内	第七項 會務費 七〇,〇〇〇 第九項 豫備費 七〇,一三〇 第十項 國庫債務 一四三,一五〇 應募費 一五三,一五〇

就任の辭

われ等菲才を顧みず舉げらるゝまゝ命ぜらるゝまゝ、筆を雜誌部に執ることゝはな
りぬ

顧みれば戰勝は日一日に國威を發揚し我國民は忠勇無双なる國民として世界の視線
を引きつゝあり、われ等亦誠意各其分に力を致し、會員諸彦の推挽により微力を斯
道に効すを得ば幸なり、謹んで就任の辭となす

征露第一之秋十月

雜誌部長兼編輯部長

宮田篤郎

- | | | | | |
|---|---------|------|--------|------|
| 全 | 委員 | 松田菊治 | 全 | 野崎芳孝 |
| 全 | 宇野益之 | 全 | 醫、四渡邊 | 全 |
| 全 | 有壁一雄 | 全 | 醫、三笹岡 | 全 |
| 全 | 吉野要 | 全 | 醫、二野村 | 全 |
| 全 | 池部正鹽 | 全 | 醫、一赤松 | 全 |
| 全 | 岡勝重 | 全 | 藥、三會根 | 全 |
| 全 | 藥、二金岡清彦 | 全 | 藥、一六嘉孝 | 全 |
| | | | 光 | |

卒業後ノ狀況ハ毎年其筋ヘ報告ヲ要シ候ニ付卒業後奉職
開業轉居等一身ニ係ル異動ハ其都度本校ヘ必ス届出ラル
ヘキ筈之處往々其運ニ至ラス爲メニ本校ハ取調方甚タ差
問候間今般左記雛形ニ依リ現今ノ狀況至急届出相成度此
段申進候也

明治三十七年十一月 日

金澤醫學專門學校

届

私儀

一何々奉職或ハ開業或ハ何地ニ於テ實地研究肩書ノ地ニ
住居或ハ轉住仕候

一何々奉職或ハ開業ノ處何月日何師團何隊ヘ召集目下服
役中

何縣何郡何町村番地

明治何年卒業

何

ノ

誰

金澤醫學專門學校御中

廣告

小生儀今般獨逸
國ニ遊學ノ爲メ
九月三日歐行ノ
途ニ就キ申候間
此段會員諸君ニ
謹告候也

佐々木 達

雜 纂

○肝硬變症ニ併發セル慢性赤痢

ノ一例

Ein Fall von chronische Dysenterie in

Verbindung mit Lebercirrhose.

醫學科四年生 酒 井 利 勝

夫レ慢性赤痢病ノ診療ハ實地醫家ノ敢テ珍稀ト爲スベキ
 モノニアラズト雖モ吾人初學ノ徒ニアリテハ一般ニ之ヲ
 實驗スルノ機會少ク特ニ普通急性赤痢患者ニ就テ見ルガ
 如キ固有徵ヲ具備セズシテ却テ他症ヲ併發スルガ如キハ
 臨床上幾分カ注意ヲ要スベキ点ナリト考フ即チ其ノ併發
 症タルヤ肝臟間質炎ニシテ而カモ其結果多量ノ腹水ト脾、
 腸ノ鬱血トヲ來シタルモノナレバ其兩者ノ關係ニ就テ多
 少興味アルヲ感ゼシノミナラズ死後此ノ患者ノ剖檢ニ據
 テ其ノ病變ヲ詳カニシ尙ホ且ツ其病理組織的所見ヲモ實

驗シ得ルニ至リタルハ余等學生ニトリテハ實ニ一層ノ幸
 福ニシテ亦タ一般ノ實地醫家ト雖モ恐ク如此キ機會ニ遭
 遇スルハ甚タ少キコト、信ズ依テ今左ニ本例ノ臨床上及
 ビ剖檢上ノ所見ノ要点ヲ摘録シテ同窓諸賢ニ頒タントス
 記事ノ粗略ニシテ隔靴搔痒ノ感ヲ免レザルハ素ト余ガ不
 文ノ致ス所讀者乞フ幸ニ諒セラレンコトヲ
 余ノ始メテ患者ニ接センハ本年一月二十二日ニシテ當時
 患者ハ高度ノ衰弱ニ陥リ褥中ニ呻吟ス就テ之ヲ診問シ且
 ツ再診スルニ追ンデ其ノ容易ニ斷定ヲ下シ能ハザルニ至
 レリ幸ヒニシテ恩師佐々木教授ノ「クリニツク」ノ下ニ實
 ニ慢性赤痢ナルコトヲ知り始メテ其ノ曩キニ余ガ疑診中
 ニアリシ「モ漸ク之レガタメニ確實トナレリ然レモ師モ
 亦タ其異常ノ症候ヲ呈スルハ肝間質炎ノ併發セルニ依テ
 來ルナキヤノ疑ヲ存セラル、モ如何セン高度ノ腹水ノタ
 メニ肝臟ハ上方ニ壓上セラレテ全ク其他覺的檢査ハ不能
 トナレリ今其經過ヲ明カニセンガタメニ患者ノ既往症ニ
 遡リテ順次之ヲ記セントス

患者 金澤市〇〇町元教員

小川 某 (男)

年齢五十五歲

血族ノ關係

父ハ四十八歲ニシテ病死セルモ其ノ病名ヲ記憶セズ母ハ七十四歲ニシテ老衰シテ死ス血族ニ於テ遺傳病ヲ知ラズト謂フ

既往症

患者幼時身體健全ニシテ七八歲ノ頃天然痘ニ罹リ十三歲ノ頃ニ麻疹ヲ經過セリ爾來疾病ヲ患ヒタルコトナカリシモ壯年ニ迄ンテ身體強健ナラズ二十歲以後ニ至リテハ時々激シキ腹痛ヲ來シ特ニ長途ノ歩行或ハ長時間ノ運動ニ際シテ臍圍ニ激烈ナル疼痛ヲ感ジ殆ンド之ヲ持續ス可ラザルニ至レリ如此キ狀態ヲ以テ荏苒シテ以テ今日ニ及ベリ患者又タ二十一歲頃ヨリ背部腹部臀部股間ニ於テ搔痒性丘疹性發疹ヲ生ジ消現常ナクシテ今日モ尙ホ之ヲ存セリト云フ二十四五歲ニシテ麻刺里亞ニ罹リ四十歲ノ頃ニ

再ビ之ヲ患ヒタリト

昨年二月頃ヨリ一日二三回ノ下痢アリ軟性ノ糞便ヲ排出セリ然レモ其量少クシテ黃色ナリ當常食慾ニ異常無ク亦々腹痛モ存セザリシガ身體衰弱シ歩行モ漸次困難トナリ全身違和ヲ感ジタリ然ルニ昨年十二月ニ至リ食物無味トナリ食慾不振ヲ來シ腹部ハ漸次膨滿シ又タ足部ノ浮腫ヲ來シ次デ顔面ニモ浮腫アリテ共ニ消張セリ本年一月七八日頃ヨリ大便褐赤色ヲ呈シ大量ニシテ時々又タ血液ノミヲ洩スコトアリ或ハ粘液狀便ト交換シ遂ニ全ク牀ヲ去ル能ハザルニ至レリ而シテ現今ハ腹痛モ無ク且ツ始メヨリ裏急後重ヲ欠如ス排尿ハ一日四回位ニシテ帶褐黃色ヲ呈スト云フ

現 症

体格中等全身羸瘦シ皮膚皺襞ヲ生ジ容易ニ撮擧シ得ベク一般ニ淡褐色ヲ呈セリ顔面ハ浮腫シ特ニ眼瞼ニ於テ著クシテ舌ハ褐色ノ苔ヲ被ル胸廓ヲ檢スルニ鎖骨上窩ハヤ、凹陷シ肋間ハ著シク陷沒セリ

胸部打診上異常ノ打響或ハ抵抗ナク心臟濁音肝臟濁音
 界共ニ通常ナリ肝臟濁音下界ハ腹部ノ異常濁音ニ移行シ
 テ之ヲ定ムルコト能ハズ

聽診上肺胎呼吸音ハ一般ニ粗裂ナリ心尖搏動ハ乳線内方
 ニ於テ之ヲ觸レ心季兀進シ心尖部ニ於テ収縮期的雜音ヲ
 聽収ス』背部ニ於テハ打診聽診共ニ異常ヲ認メズ

腹部ヲ檢スルニ中等度ノ膨隆ヲ呈シ側腹部ニ向テモ突出
 セリ腹壁ハ皺襞ヲ失ヒ滑澤ナリ然レモ靜脈ノ怒張蛇行ヲ
 透見セズ又タ臍部及ビ下腹部ノ皮膚ニハ暗赤色ノ小ナル
 丘疹數多ヲ簇生セリ

腹部ヲ觸診スルニ抵抗強クシテ恰モ太鼓ノ如ク之ニ按壓
 ヲ加ヘテ檢スルニ腹内ニ異常ノ抵抗ヲ觸レズ又タ臍圍部
 ニ壓痛アルモ其他ノ部位ニ疼痛無シ

腹部ヲ打診スルニ上腹部臍部ハ鼓音ヲ呈シ側腹部下腹部
 ハ濁音ヲ呈シ体位ノ變換ニ依テ打響變換ヲ來セリ唯ダ側
 腹部ニ於テ發音變換ヲナサル部アリ其外輕易ナル振水
 音ヲ聽収スルモ雷鳴等ヲ聽カズ

而下腿及ビ足背ニ輕キ浮腫アリ
 當時体温攝氏三十六度。脈搏八十至

檢便

大便ハ一種固有ノ臭氣ヲ放チ軟ク糜粥狀ニシテ黃色ヲ呈
 シ而カモ血液ヲ混ズル部分ハ帶褐色乃至暗褐色ヲ呈シ線
 狀或ハ斑点狀ナリ所謂血線或ハ血斑ヲ呈ス且ツ大ニ粘稠
 性ヲ有シ一部分ハ全ク血液ノ凝塊ナリ

顯微鏡下ニ檢スルニ多量ノ粘液球血球食物成分脂肪球腸
 管上皮等ヲ存在シ又タ所々ニ磷酸安母尼亞麻倔涅失亞ノ
 結晶等ヲ見タリ

檢尿

尿ハ赤褐色ニシテ酸性ノ反應ヲ呈セリ化學的檢査ニ於テ
 ハ糖分蛋白質其他ノ異常成分ナク沈澱器ニ依テ檢シタル
 ニ異常ノ沈渣ヲ認メズ

診斷

既往症及ビ現症ニ據テ診斷スルニ本患者ハ赤痢ニ普通來
 ルベキ裏急后重ノ症候ナク又タ排便時ノ肛門ノ劇痛ヲモ

欠如シ排便ノ度數モ比較的少ク且ツ便量ヤ、多量ニシテ腹部ハ膨隆セリ赤痢ニ來ル腹部ノ膨滿ハ鼓腸ナルモ之ニ反シテ此ノモノハ全ク腹水ニ依レリ然ラバ赤痢ニモ腹水ヲ來シ得ベキヤ否ヤノ問題ニ就テハ腹水ハ心肺ノ疾病腎臟病全身病ノ如キ全身浮腫ノ際ニ表レ或ハ門脈系統ノ血行障害ニ來ル外ニ尙ホ消削性疾患及ビ慢性下痢ニ於テ來リ得ベキモノナルヲ以テ慢性赤痢ニモ亦タ之ヲ發セザルニ非ザルモ稀有ナルモノトス(而シテ此ノ腹水ハ其ノ併發病ナル肝臟病ニ基因セシコトハ死後ノ所見ニ依テ初メテ其確實ナルコトヲ知り得タリ)然レモ尙ホ其ノ局所ニ於テ打響變換ヲ來サル部分アルヲ以テ見レバ此腹水ハ或ハ腹膜炎ニ依テ多少包圍セラレタルモノニアラザルヤノ疑ヲ挿メリ而シテ本患者ニ赤痢ノ確診ヲ置カザル可ラザルノ理ハ彼ノ赤痢ニ特有ナル便ノ性状ニシテ惟フニ糞便ニ血液ヲ混ズル所ノ類似ノ諸病ハ腸管系統ニ於テハ腸結核腸癌腫腸梅毒腸ノ其他ノ潰瘍及ビ腫瘍痔疾等其他消化器系統及ビ隣接臟器ノ出血性諸病穿孔外傷火傷等多々

アリト雖モ特ニ本患者ニ見ルトコロノモノハ全ク發作性ニ表ル、ニ非ズシテ却テ持續性ニ來リ血量多カラズシテ常ニ血線或ハ血斑狀ヲ呈シ(時ニ血液ノ凝塊ヲ出スト雖モ)且ツ便ノ性状甚ダ粘稠性ニ富ム況ンヤ已ニ述ベタル赤痢ノ普通症候モ必發的ノモノナラザルニ於テオヤ且ツ又タ血便ヲ來スベキ他ノ疾病ノ症候ヲ欠如セリ之ニ依テ考フルモ本患者ハ慢性赤痢ノ診斷ヲ下サル可ラズ

豫 後

赤痢ノ預後ハ一般ニ危險ナルモノタリ且ツ併發症ノタメニ益々本病ヲシテ危險ナラシムルコトアリタトヘ一旦本病ハ治スルト雖モ後年ニ至リテ腸管狹窄等ヲ貽シテ危害ヲ再來スルコトアルモノナレバ一般ヨリ考フルモ疑ハシキモノナリ況ンヤ本患者ハ經過慢性ニシテ從テ衰弱甚シク且ツ併發症トシテ著明ノ腹水ヲ有スルモノナレバ其豫后モ亦タ察スルニ餘リアリ

療 法

本患者ニ施セシ療法及ビ經過ハ不幸ニシテ其ノ記錄ヲ得

ル能ハザリシヲ以テ茲ニハタゞ一般ニ就テ述ベントス

專ラ安靜ニ幕中ニアラシメ甘朮蓖麻子油ノ如キ下劑ヲ投
ジテ腸内容ヲ排瀉セシメ妄リニ其下痢ニ對シテ之ヲ防遏
セントシテ攻撃ヲ事トス可ラズ之レ下痢ナルモノハ一種
ノ自然的良能ナレバナリ而シテ液狀ノ滋養食ヲ與ヘ体力
ノ沈衰セルモノハ善良ナル赤酒ヲ與ヘ腹部ニハ溫浴法ヲ
施スヘシ若シ裏急後重ノ煩ハシキモノニ對シテハ阿片ヲ
與フ其他生理的食鹽水ノ灌腸或ハ〇、五%ノ單寧酸溶液
ノ灌腸ヲ試用シテ著シキ良効ヲ得タリト云ヘリ
本病ノ豫防トシテハ嚴重ナル消毒ヲ行ヘ食物攝生ニ注意
スベシ

患者ノ死後ニ至リテ其筋ノ認可ヲ經テ本校構内病理解剖
室ニ於テ恩師村上教授ノ執刀ノ下ニ解剖ニ附セラレタリ
余モ亦タ幸ニシテ其間ニ介シテ之ヲ目撃スルコトヲ得タ
リ本文ヲ草スルニ當リテ其解剖記事ヲ請ヒ得タレバ之ヲ
添録セリ

病理解剖

第壹 外表検査

一男屍体格稍ヤ大營養中等躰重一〇〇、磅ヲ算ス前面ノ
皮膚一般ニ淡褐蒼白色ニシテ腹部ハ褐色ヲ呈シ(罨法ノ
タメ)死斑ハ背部ニ輕ク存ス
死後強直ハ咀嚼筋手關節下肢ノ諸關節部ニ存ス顔面ハ一
般ニ消削ノ狀態ヲ呈シ頸胸部ト共ニ記スベキノ變化ナク
腹部ハ膨滿シ按壓スルニ波動ヲ觸ル陰莖尿道孔ヨリハ少
許ノ精液ヲ洩シ肛門膨開シテ血液及ビ糞便少許ヲ漏出ス
上肢ニ變化ナク左跨關節部ニ赤色ヲ呈スル皮膚燦爛面ア
リ下脚及足背ハ少シク浮腫ヲ呈スルノ他凡テ變化ナク背
部モ亦タ然リ

第貳 内景検査

胸腔ノ開檢 式ノ如ク胸腹軟部ヲ切開スルニ皮下脂肪層
非ク筋層中等腹腔内ニハ稀薄透明淡黃色ノ液五千立方仙
迷ヲ含有シ腹膜ハ一般ニ蒼白滑澤ナルモ盲腸ノ右側結腸
各屈曲部及字狀部ノ腹膜ハ血管努張シテ其面赤色ヲ呈ス
肝ノ右葉ノ中央ハ橫隔膜ト癒着シ腹腔臟器ノ位置ニ變狀

無ク横隔膜ノ高サ左第五肋骨ノ下縁右方第四肋骨ノ高サニアリ

胸腔ヲ開檢スルニ左胸腔内ニハ淡赤色ノ稀薄液五〇立方仙迷ヲ含有シ肋膜滑澤ニシテ癒着無ク右胸腔モ亦タ同様液七〇立方仙迷ヲ含有シ肋膜ノ處見モ左側ニ同ジ但シ右側ハ左側ニ比シテ血管網ノ充盈著明ナリ

心囊内ニハ黄色透明ノ稀薄液三〇瓦ヲ含有シ内面淡紅滑澤ナリ心臟ノ大サ本屍ノ手拳大ニシテ右心内ニハ軟凝血多量ヲ含有シ房室間孔ニ二指ヲ通ス左心内ニハ少許ノ軟凝血ヲ含有シ房室間孔ニハ同ジク二指ヲ通ズ心臟ノ外面滑澤冠狀動脈ノ彎曲著明ナリ右心ノ前面及后面ノ中央ニ

睫斑各々一個アリ左心ノ后面基底ノ部ニ出血点数多ヲ存ス心臟摘出後大動脈及ヒ肺動脈内ニ水ヲ注グニ各半月狀瓣克ク閉鎖ス

右心内膜ハ一般ニ滑澤ニシテ諸所ニ白色ノ混濁ヲ呈シ殊ニ乳嘴筋ニ著明ナリ瓣膜裝置ニ變化無シ右心内膜一般ニ滑澤ニシテ同ジク諸所ニ白色ノ混濁ヲ呈ス大動脈起根部

ニ「アテロマ」斑及潰瘍ヲ存ス大動脈瓣僧帽瓣柔靱滑澤ニシテ其色帶黃淡褐色ニシテ厚サ左一、四右〇、四仙迷重サ二百五十六瓦ナリ

左肺ヲ摘出シテ檢スルニ氣管枝ノ斷端ヨリ泡沫液多量ヲ漏出ス表面一般ニ滑澤其色帶紫褐色ニシテ著シク膨滿シ按壓スルニ嗶嘖少ク、質軟、硬結竈ナシ斷面ハ血量ニ富ミ其色一般ニ暗赤色ヲ呈ス氣管枝粘膜モ亦タ暗赤色ヲ呈ス右肺ニハ葉間癒着アリ表面及斷面ノ性狀左肺ニ等シキモ血量稍ヤ少シ

腹腔内臟器

脾臟ノ大サ縱徑一〇、横徑七、厚サ二、五仙迷ニシテ脾膜緊滿シ其質柔軟斷面暗赤色ニシテ血液ニ富ム重量百八十瓦ナリ

左腎ノ莢膜剝離シ易ク大サ一〇、五幅四、厚二、五仙迷ニシテ斷面血量ヤ、多シ重サ百六十瓦ナリ

右腎モ亦タ莢膜剝離シ易ク大サ一〇、五幅四、厚二、五仙迷ニシテ斷面ノ性狀左腎ハ同ジ重サ百五十瓦ナリ

膀胱内ニハ少許ノ尿ヲ含有シ内面淡紅滑澤ニシテ變化ナシ

十二指腸内ニハ汚穢帶黃色ノ粘稠液少許ヲ含有ス粘膜炎白色ニシテ變化ナク輸胆管能ク開通ス

胃中ニ黃色ノ稀薄液少許ヲ含有シ粘膜炎帶黃灰白色ニシテ諸處ニ出血ノ斑点ヲ見ル

肝臓ノ大サ二四、五幅一二、厚六、仙迷ニシテ表面一般ニ

小顆粒狀ヲ呈シ右葉ノ上面及下面ニ局部ノ癒着アリ又タ

胆嚢底ノ一部ハ横行結腸ニ癒着ス斷面血量中等其色帶黃

淡褐色ニシテ各肝小葉ハ大ニ狹少トナリ質硬シ胆嚢内ニ

ハ黑褐色ノ内容中等量ヲ含有ス内面ニハ變化ナク又タ異

物等モナシ

小腸ニハ記ス可キノ變化ナク黃色粥狀ノ内容ヲ含有ス大

腸ハ廻盲瓣ヨリ直腸ノ下端ニ至ルマデ一般ニ特異ノ潰瘍

多數ヲ存在ス潰瘍ノ大サ大小不同ニシテ底面ノ稍清潔ニ

シテ黃白色ヲ呈スルモノト底面浮腫狀(滲潤性、壞疽性)

ヲ呈シ帶赤黃色ヲ呈スルモノトアリ而シテ如此キ變化ハ

結腸各彎曲部及ビS字狀部等ニ著明ナリ爾他ノ粘膜炎一般ニ汚穢帶藍紫色ヲ呈シ内腔粘稠ナル帶紫黃色ノ糞便ヲ含有シ處々ニ血液ヲ混ズル部アリ

診斷

赤痢、肝臓間質炎、脾臓腫大、腹水、肺臓水腫、心臟内膜ノ溷濁及大動脈起根部ノ「アテロマ」

局所腹膜炎

死因

衰弱

顯鏡的檢査所見

肝臓ヲ法ノ如ク「フォルマリ」固定法ニ據リテ切片ヲ作リ「ヘマトキシリン」「エオル」ノ重複染色法ヲ施シテ檢

スルニ葉間結締織ハ増殖シテ圓形細胞ノ滲潤アリ各小葉

ハ縮少セルモ多クハ同大ニシラ一般ニ肝細胞ニハ脂肪球

浸潤アリ胆管ハ管壁大ニ肥厚シテ其管壁中ニ小胆管ノ叢

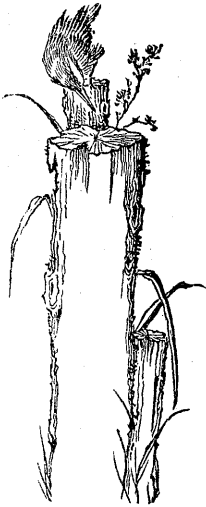
生セルモノアリ

大腸ハ先ヅ潰瘍部ノ切片ニ就キ鏡檢スルニ筋層以下ハ殆

ンド正常ニシテ潰瘍ハ筋層ノ直上ニ達シ潰瘍中ニ壞疽性物質ヲ含有ス其周邊ノ粘膜ハ腫脹シテ厚サヲ増加シ圓形細胞ノ滲潤アリ表面絨毛ニ近キ部ハ壞疽ニ陥ラントセルノ狀アリ周圍ニハ瀰胞ノ腫大セルモノアリ未ダ潰瘍ヲ作ラズ而シテ滲潤肥厚セル部ヲ檢スルニ該部ハ全ク廣大ナル細胞滲潤ヨリ成リ所々ニ出血シ其表面ハ壞疽ニ陥レリ其他ノ所見ハ前者ト同一ナリ

終リニ臨ミ此報告ヲナスニ就キテ佐々木、村上兩教授ノ懇篤ナル指導ヲ與ヘラレント深謝ス

編者曰。此ノ種ノ寄稿ハ大ニ歡迎ス、學生諸君ニシテ外來實習或ハ施療患者ノ Krankengeschichte ナ起草セラルルニ際シ若シ幾何ノ價值ヲ認メラントタルモノアル時ハ之ヲ投書規則ニ準ミテ投セラントメテ切望ス。余輩ハ之ガ爲メニ餘白ヲ割クニ吝ナラサントハナリ



漫 録

Aus Moltkes Leben.

S. W.

I

Graf Moltke besuchte von seinem Gute Kreisau auf einem seiner Ausflüge einen Gastwirt und liess sich ein Glas einfaches Bier einschenken. Der Wirt führte nur das sogenannte einfaches Bier und ausnahmsweise auch einmal Doppelbier, welches in dortiger Gegend sehr beliebt ist, von erstem kostet ein Glas 5 pfennig, von letzterem aber 10 pfennig. Der wirt glaubte nun, dem Herrn Grafen das bessere Bier vorsetzen zu sollen, was auch geschah. Feldmarschall Graf Moltke, welcher bei diesem Wirt schon zu öfteren Malen Einkelrn gehalten, legte, nach dem er das Bier getrunken und sich lobend über dasselbe ausgesprochen hatte, ein Zehnpfennigstück auf den Tisch, in der Erwartung, dass der Wirt 5 pfennig herausgeben würde. Da nun der Wirt das Stück dankend einsteckte und nichts herausgab,

empfahl sich Graf Moltke, ohne ein Wort zu verlieren.

An einem der nächsten Tage kehrte der Feldmarschall wiederum, wie gewöhnlich, bei dem Gastwirte ein und verlangte ein Glas Bier. Der Wirt schenkte auch heute ein Doppelbier ein. Vor dem Abfahrt wurde der Wirt gerufen, und Moltke sprach zu demselben: „Ich habe Ihnen beim letzten Hiersein 10 pfennig gegeben, und da Sie mir nichts herausgeben, so habe ich noch 5 pfennig gut, womit das heutige Glas Bier bezahlt ist.“ Auf die Bemerkung des Wirts, dass es ja Doppelbier gewesen sei, welches 10 pfennig koste, erwiderte Feldmarschall Graf Moltke: „Ich habe ja kein Doppelbier bei Ihnen bestellt!“ Sprach's und führte lachend davon. Ein charakteristisches Beispiel für die Sparsamkeit, worauf der Feldmarschall trotz seines Reichtums immer hielt.

II

Als der Feldmarschall einmal in Ragaz zur Kur war, ging er allein durch den Wald nach dem Dorle Pfäfers. Es war sehr heiss geworden, und er verspürte starken Durst. Er ging ein Dortschenke, um sich mit einem Trunk zu erfrischen. Der Wirt stellte sich zu ihm und

sagte:

„Wohl Kurgast in Ragaz?“

„Ja.“

„Der Moltke soll ja da sein?“

„Ja.“

„Wie schaut er denn aus?“

„Nun, wie soll er denn aussehen?“

„Wie einer von uns beiden.“ —

○中學に在る友に送る歌

醫一 伊藤哲一

むら雲低く秋老いて
 嵐をいたみ我泣けば
 枕邊近く鈴虫の
 いかでか我は他郷にて
 涙の露の置さまざり
 嗚呼花鳥の色よつけ
 月日の影も清らけき
 思へば去年は君と我
 赤き心を汲みわけて
 深く契りて學び舎に

夕影薄き庭の面に
 散るや紅葉の二葉三葉
 哀れ知れよと唧つれば
 漂ふ身とて泣かざらん
 夢安からぬ思かな
 音につけ君を想ひ出で
 君の心と慕ふなり
 互みに袖を連ねて予
 兄と思はれ弟と呼び
 文武の道を勵みてし

樂しき月日夢と過ぎ
 淋しいかなや落莫の
 夕の雲を眺むれば
 若草もゆる春の日は
 和歌の浦邊にたどりしを
 やさしく照す月影に
 今年もかくと思ひしに
 せめてあはれと思しなば
 度々文はよせよかし
 他國にしたふ我心
 破窓に響く朔風に
 ありし事共偲びつつ
 思ひ止まんと思へ共
 なほ消ねやらす我前に
 しばし思にふける時
 歸る行くえや紀の空か

別れし今や物憂きや
 天地に満ちし秋の聲
 色冷かに流れ行く
 衣連らねて四の袖
 虫の音繁き秋の夜半
 心の奥を語りつぎ
 慰藉に堪へぬ我心
 學びの業は繁かるも
 山路へだつる幾百里
 君を除きて誰か知る
 故山の夢も結び得ず
 征衣濡す幾十度
 ゆかしき君の面影は
 故國の天を眺めつつ
 空をかすむる流星の

○草 枕 (其一)

林 秋 峰

はしがき

吾れ未だ病を得ざる年の八月の九日と云ふに吾れは舞蝶
 の君と共に紀の路の空に杖をひけり、那智のみ山に上り

ては、常樂我淨の風に妄想のさ霧を晴し、修禪の峯より
 流れ出づる瀧水には愛執煩悩の垢を洗ひ三位中將維盛が
 故郷にいかにも松風恨むらんと哀殘して入水せしと云ふ山
 成鳥を右にして佐野の浦邊をつたひつゝ新宮に入り熊野
 川を遡り瀨溪の峽間に掉して十津川越三十里の山道向上
 れば万仞の青壁刀を削り直下せば千丈の碧潭藍に染まる
 と云ふ建武の昔の跡ふみてからくも五條にたどりつきぬ
 此うき旅の七日間眼に見耳に聞き心も感ぜしくさくを
 まゝならむ筆に山鳥の尾の長々しく書き綴りてかくなん

出 發

誰れやらが「ひらく」と木の葉うごきて秋立つげに立
 秋が過ぐれば規則かの様に桐の老葉に風が立ち、秋つげ
 顔又一葉二葉を庭に散り敷き、虫も亦今日よりは吾が住
 家々と云はぬばかりに咽び初しかど、只秋と云ふも名の
 みにて軒の忍の涼しさも熱さ忍ぶによしもなく、青簾も
 る風すらも流るゝ汗を消し難し、やさしくも咲き出でに
 し秋海棠も、うたてや連日の暑さに凋れ、草も木も人も
 只撒く水にからくもいきつく昨日今日「死にたしと云ふ
 も暑さのあまり哉」の吾身なりけり、如何せん窓前獨り
 風を待てど、翠竹なければ清風來らず、飛泉なき故涼風
 得がたし然かも狹隘撲陋の家朝に蒼嶺を見る能えず、夕
 に青海を望むを得ず、只終日釜中に坐して焦心苦慮する

ばかりにて、時には清水流るゝ柳陰、青松白砂の夏の磯ろどろ夢路をさまよひて、遊心勃勃とあさへかたし終に葉月の九日と云ふに吾校友舞蝶君と共に、紀の路の空は旅衣、長汀曲浦の磯づたひ、巖徑崎嶇の道たどり山に水に積る心の憂晴し、足にまかせて、歩まばやと、朝まだきより心も空に旅づくり、洗晒しの白き服脚絆紺足袋草鞋ばさ杖の代りの蝙蝠傘地圖一葉と云ふ身輕殊に懷中もいとくゝ軽く、正十二時と云ふに飄然として門を出づ、互に前途を語りては思はず笑を催され、思を南海の雲に馳せ、道もいろくゝ二時半ばかりに川口波止場に着しぬ、出帆は五時と云ふに止むなくあこをさまよへりあゝ其待遠ざ……

隅田川丸

午後五時と來りぬ、今やくゝと待ちわびし隅田川丸は汽笛一聲黒煙殘して、うき身載せつゝ安治川波を蹶つて南駛しぬ、幾多の船、家人を見捨てつ。長く突出たる築港の石堤、黒く煙吐く河漕船の一つ二つ三つも早や過ぎて、西へくゝと急ぐなり、頃しもやゝ紅を結びたる夕陽は淡路島山の北端の上僅に一竿、影は綠りなす夕風の波は落ちて島陰よりこゝに金色の橋を架け、靜に眞帆片帆の小島がくれに消れて行く、欸乃の余韻もかすかに、金剛葛城さては紀泉の山々と淡き霧に包まれて美しき夕榮を

浴び眞華堺の濱邊とも覺しきにまばゆきばかり輝けるは燈臺などの硝子板の反映するなるべし、やがて眞紅の色に名殘留めて夕日は和田の岬松青き中に入りぬ、ささ血汐の逆らしたらん如くに西天を掩ふ雲、反照して四方の空は櫻色に香ひ彼金色の橋もいつしか流れて濃藍の水澄色に彩られり、連山は模糊として遠くくゝ夢の如くに聳え紀泉の磯山は濃き紫に染め變へられ、其上に虎の如き龍の如き叢雲の取忘れられしかの如く行方も知らずさまよへり、前よりは鐵拐岳、淡路島、黒き大牛の伏したらんが如し、右手には磯の松原縁り深く、あこゝの海士の伏屋には藁鹽草焼く夕煙り渚に遊ぶ鷗に浴し、濱千鳥の打群れて白浪のあなた空に消れて行く、あゝ今宵いづくに宿かりて友と樂しく明すらん、大物の浦、生田の森も知らぬまに過ぎて船は兵庫の阜頭に止まりぬ、夕霧は此自然の手になれる微妙なる墨繪を包み、山も島も、松も、皆灰色の淡黒色と化し只兵庫の市の燈火、波間の漁火の呼吸するのみにて宵の明星空にさらめきぬ吾が世界々と云はぬばかりに

七時と云ふに船は發しぬ、波枕ゆられくゝて夢安からず眠れぬまゝに甲板に出づ堪へぬ思の波の上、空はくまなく牙之渡り、銀河斜にかたむきて初秋風乎袖拂ふ故郷いづくと眺むれど、其れかと思ふ雲もなく、星影流れ夜さ

むし闇を寄せ来る波を蹶つて船は紀淡海峽に入り十一時四十分と云ふに和歌山に着しぬ、眺むれど只闇々黒裡、數條の燈火の明滅するのみ、實に自然塵もなく聲もなく色もなし、あゝ詩人よ來れ、來りて歌へ、星はあり、光りはありやがて船底深く横はり假寐の夢に入りぬ、楫枕闇のひま吹く小夜風に夢温かならず氣笛に驚かされて甲板に出つ舞蝶君は己に北を眺めて佇めり、思は吾身のみかは、黒きく牛の伏したらん如き磯山の後、遠く參差たる淡き山の端に、鎌の如き下弦の月、白き雲に半ば隠されて紫の空に懸り、静か又暗の海づらを覗けり見渡す限り沈々寥々はしけ船の檣柏子寂寞を破つて聞ゆるあるのみ、時に午前二時三十分湯淺の磯止るなりき、船と駛りぬ、余れは甲板に立ちてろゞろに家郷を想ひ前途を思ふ、見渡せばいざり火遠く雲か水かの波の上今宵の獲物を喜びてや上に下に左に右よゆられく磯邊をさして近づくなり、あゝ海士人よ、一葉舟、通宵寝ねてうねくの、からき浮世の仇浪をあさり渡りて妻や子に、盡すはかなき身に今ある、一朝風荒れ浪怒る時蓬屋の床に待つ輩の、あゝ其嘆きや如何なるらん瓊樓朱閣に夢温き人もあるに、げよはかなきは運命よ、船は心もくまらず駛りぬ、油の如き水は軸に碎けて銀色に閃き、散る飛沫は雪の如く白く飛び、静かに眠れる、海を驚かして、四時十五分

比井崎に着しぬ、又も余はまどろめり、印南に着せしも知らで八時と云ふに眼を開けば、船は田邊に留るなりき、日は己に磯山の上に三竿、並本松、白き砂、低くは今朝げたく伏屋の煙り、捨小舟二つ三つ四つ、打寄する男浪女浪一刷毛したらん如き空げに自然の繪卷物美と云えんか神と云はんあ、やがて鉛山岬の一角を廻る龍の如き虎の如き石の上釣叟二人其他奇岩怪石交錯突兀、俗塵にまみれし眼を洗ふに足る、然れども汐路遙けき浪枕つれくゝなるまゝに、いつとはなしにまどろみぬ潮の岬も知らず午后一時と云ふに串本に着す、次で古坐も過ぎ次は勝浦と呼ぶに、いろく裝をなして、甲板に出づ、太平洋の荒浪は勢よく舷を打ち且つ今日は逆潮との故にて動搖甚しく、洋婦人の横臥呻吟せるあり、赫ら顔のをのこの伏するありき、巨濤は澎湃として船は揺り上かられ揺り下かられ、哮吼喧慄たる怒濤を衝いて大地岬を廻り勝浦灣に入りぬ、やがてはしけ船にて上陸す時午后五時和歌屋となん呼ぶに投宿しぬ (次號)

○雨絃風箏

釣雪生

曾てわれ拙き筆を以て本誌に大方の諸君と見ゆ而して今はまた新學年の開始と共に筆を本誌上に執ることゝなり

ぬ、時維征露第一之秋、百萬の貔貅は遼陽の月に軍歌を奏し、數千の鱗鱗は日本海を遊弋して意氣天を衝くの概あり、バルチック艦隊は何、コサック騎兵は何、忘れもせず二ヶ月前第九師團出征の節吾人は謹嚴なる体度を以て提灯行列を催しるの行を壯とす

凱旋は蓋し何れの日や、退て考ふれば猥りに鳥岐的精神を以て火山の性格を以て鷓首すべからざるなり、須く大陸の体度を以て吾等が専門の學藝を鑽き以て戰勝と共に國威を中外に發揚せざるべからず一年計有一月とせば吾等が新學年の開始は此覺悟を要す、而して秋高く馬肥ゆるの候本誌を發刊し、共に蘭燈を剪つて萬籟止むの時是を案上に繙く豈に大國民の雅懷ならずとせむやわれ一夜思ふまゝをものし試みに兩絃風箏と名けつ

○ 新學年と共に學科は皆新になりき、教授諸賢の博識いふも嗚呼なり、されどわれ小川教授の婦人科を聴くの第一限、胎兒の母體^{マタ}に在る猶ほ人の宇宙にあるが如しと、蓋し至言なり涙香の天人論、藤村操の巖頭の感、嘲風博士の復活の曙光途に此一言にあり

○ 先學年に於て恩師木村博士の銅像を鑄られ、是

(漫 錄)

を濟々堂に安置せらる、一度堂に入れば親しく博士に接するの思あり、蓋し鑄造の妙と博士高德の存する所によるならんか、安置せる臺石に刻める函峰先生の題辭、僅々五十有二字を以て能くろの曰はんと欲する所を盡さる、余は名文として博士の銅像と共に無に傳ふるを希ふ、左に錄しん愛好の疆に頒つ

題辭

木村醫學博士振鐸本校二十年執職懇勸陶冶子弟成器甚多因症施術回生起廢同人胥謀欲表其績鑄肖像建之校內以垂無疆明治三十七年七月村上珍休敬題

○ 「仰臥三年」を著して世人に知られたる醫學士近藤常次郎氏號を燕處といふ、本春我々の書を讀んで始めて崇高なる氏の學才を慕ひき、編中ことに醫學問題に於て看病學を論ぜらる、所思想界に下落せる醫學界を戒めて餘す所なし、而して九月三日遂に京都大學病院に於て白玉樓中の人とならる、ア、蕙蘭空しく中道に凋む寔に惋惜の極みなり、謹んで句をものして遙に氏の靈を吊す

野分かな星落つる夜の京の空

○

Sage mir, mit wem du umgehst, so sage, ich dir, wer du bist; weiss ich, womit du, dich beschäftigst, so weiss ich; was aus dir werden kann.

○

家は皆花咲く草にうつもれて鄙にゆかしや
陰士詩を誦す

*

海士の子の二人留守して父をまつ小ざき戸
口の月に夜更けぬ

*

誰に似し若き御肌のウエニウスろ暗に刻み
てひとりほゝゑむ

○

灯剪つて静座す秋の書院かな
さびしさを君と語るや閑呼鳥

灯して野道をゆくや女郎花
豊年の太鼓さゆるや月の村

秋暑し畑に一つの眞桑瓜
僧房の萩に句會す日曜日

名月や伏見を下る月の客

繪行燈に稻刈の句や秋祭

ハラ／＼と椎の落つるや板庇

黄なる葉のくる／＼舞ふてゆく秋予

○

月 泛

仰瞻明月俯金波 奈斯舷頭夜色何 更有江

心清絶事 滿天風露鶴聲過

編者曰。漫録の投稿積爲山、憶くば誌數限りあり割きて次號に延ばすの止を得ざるに出ず、幸に諒せよ

* * * * *

* * * * *

* * * * *

會 報

○本會役員 (明治三十七年九月)

本年度本會役員は左の人々に囑託せられたり

會 長 高 安 右 人

副 會 長 櫻 井 小 平 太

理 事 大 西 克 孝

雜 誌 部 長 宮 田 篤 郎

委員 松田 菊治 野崎 芳孝 宇野 益之

醫、四 渡邊 疆 全、四 有壁 一雄 醫、三 笹岡 芳名

全、三 吉野 要 醫、二 野村 義雄 全、二 池部 正鑒

醫、一 岡 勝重 全、一 赤松 省

藥、三 曾根 章 全、二 金岡 清彥 全、一 六嘉 孝光

講話部長 上田 計二

委員 金原 三郎 醫、四 佐々木純二郎 全、四 谷澤 一郎

醫、三 杉部多米吉 全、三 藤井 保二 醫、二 高野 宗重

全、二 平澤 嘉圓 醫、一 小林 進 全、一 中谷内善雅

藥、三 溝口 龍三 全、二 久田 徳 全、一 教見宗一郎

遊技部長 湯目 隆績

委員 福見常太郎 醫、四 鳴脚 光榮 全、三 久我 龜

全、二 志田 主稅 全、一 鈴木於菟吉 藥 湯淺 啓一

劍道部長 高山 基重

委員 醫、四 水上俊三 全、三 石橋 三也 全、二 長田八三郎

全、二 大原米次郎 藥、三 稻崎 龍助 全、二 吉野 新八

全、一 西野 宗之

柔道部長 石川 喜直

委員 醫、四 小町環 全、三 福田 四郎 全、二 高井 魯一

全、一 宮村誠一郎

藥、三 辻 實治 全、二 新名 蓋 全、一 土田 勇義

弓術部長 下平 用彩

委員 醫、四 笹田順次 全、三 原 久雄 全、二 谷道 清

全、一 河合 勝

藥、三 金堂 圓 全、二 手塚甚之助 全、一 寶達 佐平

代議員 醫、四 中村德藏 全、三 柴原 外男 全、二 太田 勘一

全、一 伊藤 哲一

藥、三 海津 四郎 全、二 高野 友衛 全、一 高橋 義之

書記 山本兵三郎 高柳謙次郎 增野與三九

堀内 茂成

○新入生諸君を迎ふ 釣 雪 生

蓋し軍國多事の世は是に俱ふ學術技藝の發展を要し眞に全局に於て戰勝國民たらざるべからず、然りさきに畏れ多くも

陛下は東京帝國大學卒業式に御臨幸の際親く文部大臣を召され教育の忽にすべからざるを宣ひしと、ア、諸君よ諸君の既に高等小學の小環リットルサクルを越え中學の中環ミッドルサクルを越え今や専門高等の學術を學ばれんとす、而して其小環リットルサクル其中環ミッドルサクルは共に是れ普通教育のみ、換言せば基礎たる常識コンセンシズ養生のみ、今は則ち然らず専門教育の大環グレートサクルことに日進月歩の神聖なる醫學研究に在り、力學須報家國の精神を以て吾人と共に着實なる研究を卒へ、和氣緩々、以て上聖旨に應へ、下國家に報ゆる所なくんばならず、徒らに

戰勝に酔ふは是れ小國民のみ、敢て迎辭となす。

○入學式と入學生

九月十二日午前九時本校濟々堂に於て學式、職員及學生整列、高安校長は莊重なる態度を以て入學式を演べられ、併せて先徒心得を朗讀せらる。

次で櫻井教授の入學生及舊來生に向て一般在學中遵守すべき條項と學校紀律の方針とを述べらるゝこと諄々。右にて全く式を終へ、級長は各別室に於て各級生徒に諭さるゝ所ありたり。

今入學許可の學生諸君の氏名及縣名を擧ぐれば左の如し

醫學科之部

- 小林 進(富山) 伊藤 哲一(和歌山)
- 赤松 省(兵庫) 加藤 錠吉(愛知)
- 酒井 碩治(長野) 徳久 恒治(石川)
- 村松 貞治(新潟) 城谷 隣賢(富山)
- 辻井 禮太郎(京都) 梅岡 幸三(石川)
- 山野 幸吉(和歌山) 寺田 久十郎(東京)
- 小西 孝憲(石川) 森 衆次郎(富山)
- 中村 廉三(富山) 小島 喜太郎(石川)
- 榊原 光之助(愛知) 中谷 内善雅(石川)
- 佐竹 清吉(富山) 岩井 源市郎(奈良)

- | | |
|-------------|------------|
| 上村 貫三(新潟) | 馬庭 駿一郎(島根) |
| 河崎 正雄(石川) | 鎌尾 万明(兵庫) |
| 木村 朋三(群馬) | 澤村 恒松(石川) |
| 大掛 長次郎(新潟) | 古屋 與三(石川) |
| 梅澤 亮吉(石川) | 岡 勝重(石川) |
| 中本 和三郎(石川) | 上木 隆基(福井) |
| 市島 敬太郎(石川) | 森田 茂次郎(富山) |
| 福田 美明(富山) | 大西 慶明(愛媛) |
| 奥山 正雄(三重) | 關 根平(栃木) |
| 西頭 安治(富山) | 藤本 万三郎(石川) |
| 吉澤 祐寛(富山) | 若槻 寛隆(長野) |
| 山崎 太一(富山) | 早川 清延(高知) |
| 近澤 信盛(高知) | 太田 得郎(島根) |
| 鈴木 啓一郎(島根) | 鈴木 於菟吉(石川) |
| 藤塚 本吉(岐阜) | 廣瀬 淵龍(滋賀) |
| 月岡 勝治(新潟) | 杉下 孝造(石川) |
| 岡崎 虎次郎(和歌山) | 梶川 甚一(廣島) |
| 尾崎 芳壽(島根) | 遠山 繁(長崎) |
| 風間 文一(新潟) | 今井 外吉(石川) |
| 梶川 靜夫(廣島) | 駒田 一正(岐阜) |
| 高野 政二(埼玉) | 中川 善松(石川) |
| 宮村 誠一郎(石川) | 伊藤 秀雄(大坂) |

大野留次(愛知)	守部廉次郎(石川)
淺野達也(富山)	莊田芳根(愛知)
勝谷德三郎(愛知)	才田猶次(石川)
久津明一(德島)	小田善壽(高知)
木越豐松(石川)	西坂武茂(島根)
鈴木琢磨(山形)	名取博三(山梨)
長久開一郎(富山)	大原米治郎(京都)
齋藤銀一郎(岐阜)	本塚義角(埼玉)
田中三彌(石川)	内田理治(埼玉)
石丸弘毅(富山)	澤田壽三(埼玉)
金子義長(新潟)	藤井最正(新潟)
矢原準一(石川)	谷川芳輔(石川)
上里良温(沖繩)	穂刈光平(新潟)
宮地浩氣(岐阜)	副田實成(廣島)
河合勝(福井)	吉川友信(石川)
服部暢助(新潟)	久高唯忠(沖繩)
藤崎榮吉(石川)	堀雅壽(埼玉)
美原文二(宮崎)	伊藤春馬(石川)
大野貞雄(新潟)	中島鶴治(福島)
西宇忠太(岡山)	伊藤祐造(山形)
新谷成三郎(石川)	阿原信次(滋賀)
小林唯四郎(長野)	秋山實(静岡)

關川敬治(石川) 韓清泉(清國)

厲家福(清國) 鷹津冬藏(兵庫)

淵原隆庵(石川) 坪川梶(福井)

須賀芳篤(山形) 加藤健之助(福井)

藥學科之部

菅野喜一(兵庫) 大澤誠一(岐阜)

磯貝延司(岐阜) 日下部秀太郎(東京)

高橋義之(富山) 六嘉孝光(熊本)

丹波橋二(富山) 松井長兵衛(富山)

森正英(富山) 岸岡龜之助(大坂)

津田弘(福岡) 數見宗一郎(富山)

島隆然(北海道) 南日紫郎(富山)

井口爲四郎(富山) 藤卷國平(新潟)

太田卯三郎(群馬) 寶達佐市(石川)

矢牧米治郎(愛知) 根岸改作(埼玉)

村上會治(山口) 田中新太郎(三重)

西野宗之(富山) 土田勇義(富山)

城石常次郎(和歌山) 上田昌一

○級長囑托 本學年級長は左の諸先生に委託せられ
たり

醫學科第四年級 教授 大西克孝
醫學科第三年級 教授 宮田篤郎

醫學科第二二年級 教授 村上庄太
 醫學科第一一年級 教授 石川喜直
 醫學科第三二年級 教授 櫻井小平太
 醫學科第二二年級 教授 高山基重
 醫學科第一一年級 助教授 金原三郎

○本學年の各級幹生左の如く任命せらる、但し第一一年級は未定なり。

醫學科第四年級幹生

建部 鈴次郎 佐々木純一郎 齋藤 傳平
 鴨脚 光榮 谷澤 一郎 中村 徳藏

醫學科第三年級幹生

柴原 外男 石橋 三也 久我 龜
 杉部 多米吉 原 久雄 吉野 要

丹羽 直

醫學科第二二年級幹生

佐藤 武 太田 勘一 小黒 仁太郎
 藤井 一雄 平澤 嘉圓 吉田 宗一

野村 義雄 高野 宗重

醫學科第三年級幹生

西澤 寛二
 醫學科第二二年級幹生

金岡 清彦

○叙任及辭令

金澤醫學專門學校教授 大西 克孝
 金澤醫學專門學校教授 佐々木 達
 四級俸下賜

(六月三十日、文部省)

任陸軍三等軍醫

春田 久太郎 松波 操
 井上 隼雄 鷺山 他三郎
 太田 精一 島 誠 郁
 福岡 喜洋 永江 直之
 松田 研吉 橘 三九
 長崎 謙次
 高森 萬次郎

任陸軍三等藥劑官

(以上七月一日)

叙正八位

(七月十二日)

任海軍大軍醫 海軍中軍醫從七位 武田 正壽
 任海軍大軍醫 海軍中軍醫從七位 大西 瀨治
 任陸軍一等軍醫 陸軍二等軍醫從七位 高岡 榮

(七月十三日)

各通

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

熊谷兵次郎
松浦啓三
河村多郎
小林茂樹
關口通太郎
駒井定哉

(以上八月三十日)

陸軍三等軍醫正八位
永井環
齊藤幸作
百谷義一
田中正一
吉川砥直
宮越平次郎
橫井嘉亟

任陸軍二等藥劑官

陸軍三等藥劑官從七位

圓山萬三郎
早瀬三求
戶田伊代治
佐伯亮齋

(八月三十一日)

金澤醫學專門學校教授

佐々木 遠

免本職補臺北衛戍病院附

臺灣守備步兵第一大隊附陸軍一等軍醫

松浦啓三

免本職補臺南衛戍病院附

臺灣守備步兵第十一大隊附陸軍一等軍醫

熊谷兵次郎

(以上七月二十五日、陸軍省)

任海軍少軍醫

(九月十日)

海軍少軍醫候補生

小山田繁三郎

十級俸下賜

愛知縣立醫學專門學校教諭

久保武

(八月十八日、愛知縣)

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

東良平

願ニ依リ金澤娼妓検査醫並金澤娼妓病院醫員ヲ命ス

越野義三郎

金澤娼妓検査并金澤娼妓病院醫員ヲ命ス

高口保太郎

月手當金給與

金澤娼妓検査醫并金澤娼妓病院醫員兼務ヲ命ス

衛生巡視員

關屋林之助

各通

全
全
全
全
全
全

神保正長
諸角友平
田中一次郎
河合鷹
木下克雄
北川健三

第十卷雜誌第三十五號

月手當金五圓給與

(以上六月二十二日、石川縣)

堀田 圭三

金澤病院醫員ヲ命ス

月俸金拾八圓給與

(以上六月二十四日、石川縣)

山田 謙次

産婆試験委員ヲ囑託ス出務日當金參圓給與

(以上七月二日)

金澤病院醫長

大西 克孝

年手當金四百圓給與

(七月五日)

依願免職務

金澤病院藥劑師

林 京太郎

願ニ依リ職務ヲ解ク

(以上七月十二日、石川縣)

石川縣鳳至郡浦上尋常小學校醫

澤 賢 吉

石川縣鳳至郡内保尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金四圓給與

石川縣鳳至郡浦上尋常小學校醫

澤 賢 吉

石川縣鳳至郡別所尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

(以上七月二十五日、石川縣)

金澤病院醫員囑託

谷口 長松

金澤娼妓検査醫并金澤娼妓病院醫員ヲ囑託ス
月手當金五圓給與

(以上七月二十六日、石川縣)

依願免職務

(以上八月六日、石川縣)

金澤病院醫員

宮越 常太郎

檢疫醫員ヲ命ス出務日當金壹圓五拾錢給與

(以上八月十一日、石川縣)

林 義 輔

石川縣能美郡波佐谷尋常小學校醫ヲ囑託ス
年手當金壹圓給與

太田 他計作

石川縣能美郡瀨領尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス
年手當金壹圓給與

太田 他計作

石川縣能美郡打木尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス
年手當金壹圓給與

太田 他計作

石川縣能美郡赤瀨尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス
年手當金壹圓給與

太田 他計作

月俸金四拾圓給與
月俸金貳拾五圓給與

(以上八月十二日、石川縣)

金澤病院醫員

三木 三郎
熊澤 清隆

月俸金貳拾五圓給與

金澤病院醫員

吉住保

月俸金貳拾圓給與

全

加藤寬

月俸金貳拾圓給與

全

太田友市

月俸金貳拾圓給與

全

月原秀範

月俸金貳拾圓給與

全

笠雋吉郎

依願免職務

(以上八月十三日、石川縣)
金澤病院藥劑員

新次郎

依願免職務

(以上九月三十日、石川縣)
金澤病院醫員

越野義三郎

檢疫醫ヲ命ス

越野義三郎

月手當金五拾圓給與

(以上九月三日、石川縣)

○會員動靜

○通信に由れば本校出身若くは本校に縁故ある軍醫藥劑
官諸氏は概ね左の如し

留守第三師團軍醫部長

一等軍醫正

庄田喜太郎

金澤豫備病院長

二等軍醫正

山本貞二郎

第六師團野戰病院長

二等軍醫正

寺西幸作

第九師團野戰病院長

三等軍醫正

野口詮太郎

第一師團野戰病院長

同

篠尾明濟

第十一師團野戰病院長

同

小原芳雄

第九師團野戰病院長

同

鶴見金子郎

臺灣守備步兵第二大隊附

一等軍醫

山口茂太郎

第三師團衛生隊醫長

一等軍醫

村田醇

近衛師團衛生隊醫長

同

岩田一

步兵第三十聯隊附

同

丸山耕平

金澤豫備病院附

一等軍醫

小林茂

秋田衛戍病院

同

山秋勘之助

野戰砲兵第十一聯隊附

同

本多勝久

步兵第四聯隊附

同

田口以文

野戰砲兵第七聯隊附

同

田上涉

第十師團衛生隊蹄廠附

一等藥劑官

淺野駒太郎

騎兵第九聯隊附

一等軍醫

高岡榮

臺南衛戍病院附

一等軍醫

能谷兵二郎

臺北衛戍病院附

同

松浦啓三

第九師團衛生隊附

同

河村多郎

第九師團患者輸送部

ヨ同

森岡市太郎

步兵第七聯隊

ヨ同

沼田布之

野戰砲兵第九聯隊補充大隊附

コ同

池田昭

山口衛戍病院附

コ同

生駒廣太郎

臺北衛戍病院附

コ一等軍醫

飛見丈俊

步兵第三十五聯隊附

二等軍醫

星野正齊

留守第十師團軍醫部々員

同

國分金城

留守第九師團軍醫部々員	二等軍醫	橋本 監次郎
第十一師團野戰病院附	同	神谷 貞二郎
步兵第四十八聯隊附	同	池田 耕
第十二師團衛生隊附	同	澁谷 孝慶
步兵第十聯隊附	同	橋本 喜久三
第十二師團衛生隊附	同	竹下 麗三郎
清國駐屯軍病院附	二等藥劑官	市村 鉄外
臺北衛戍病院附	同	小西 震二郎
臺南衛戍病院附	同	渡邊 鉄
第九師團衛生隊附	同	高島 初四郎
札幌豫備病院附	二等藥劑官	石田 太吉
第三師團衛生隊附	同	山岸 理一郎
第三軍兵站監部附	二等軍醫	小村 茂樹
臺南衛戍病院附	同	關口 通太郎
金澤豫備病院附	同	○駒井 定哉
步兵第二十六聯隊附	同	戸田 伊代治
金澤豫備病院附	同	○早瀬 三求
步兵第五聯隊附	同	佐伯 亮齊
第九師團野戰病院附	二等藥劑官	圓山 萬三郎
第九師團臨時衛生隊附	同	淺井 文太郎
第九師團衛生豫備員	二等軍醫	森川 修
第九師團衛生隊附	同	大澤 五月

第九師團野戰病院附	二等軍醫	東 良平
第九師團野戰病院附	同	北川 健三
步兵第七聯隊附	同	木下 克雄
第九師團野戰病院附	同	河合 麟
第九師團野戰病院附	同	田中 一次郎
第九師團彈藥大隊附	同	諸角 友平
第九師團架橋縱列附	同	神保 正長
第九師團衛生隊附	同	齊藤 幸作
輸重兵第九大隊附	同	白谷 義一
第九師團兵站彈藥縱列附	同	田中 正一
第二師團患者輸送隊附	同	吉川 砥直
工兵第九大隊附	三等軍醫	清水 秀夫
第九師團軍醫部々員	同	○増田 貞吉
步兵第三十六聯隊附	同	○松村 魁
步兵第十一聯隊附	同	藤波 謙
第五師團野戰電信隊附	同	太田 長作
步兵第三十五聯隊附	同	羽根田 信次
步兵第七聯隊附	同	吉井 康次郎
騎兵第九聯隊附	同	小島 顯治
第九師團第四補助輸卒隊附	同	春田 久太郎
第九師團第七補助輸卒隊附	同	井上 隼雄
第十二師團衛生隊附	三等藥劑官	高多 久正

第四師團野戰病院附	同	宮川 一雄
第四軍兵站監部附	同	長崎 謙治
第九師團衛生隊附	ヨ三等軍醫	深見 貞之助
第九師團衛生豫備員	同	宮井 勇
金澤豫備病院附	同	北 豐 吉
第四師團衛生隊附	同	上坂 政太郎
留守第九師團軍醫部々員	同	小西 俊三
輜重兵第九大隊附	同	辻本 辰之助
輜重兵第二大隊附	同	眞柄 佐一郎
金澤豫備病院附	同	○酒井 佐太郎
第九師團野戰病院	同	八枚 政孝
同	同	近郷 重孝
第二師團衛生隊附	同	渡邊 十治
后備步兵第十六聯附	同	村田 讓
第九師團衛生隊附	同	堀 政次
輜重兵第九大隊附	同	吉江 衆太郎
第九師團衛生豫備員	同	瓜生 伊重
第九師團野戰砲兵第九聯附同	同	野嶽 利七
后備步兵第七聯隊附	同	杉山 政長
第九師團第六補助輸卒隊附同	同	鷺山 他三郎
同 第九補助輸卒隊附	同	林 正雄
同 第八補助輸卒隊附	同	太田 精一

步兵第十九聯隊補充大隊附同	同	島 誠 郁
第九師團第五補助輸卒隊附同	同	永江 直之
第九師團第一補助輸卒隊附同	同	松田 研吉
后備步兵第三十六聯隊附	同	橘 三九
金澤豫備病院附	同	毛利 靜一
步兵第三十五聯隊補充大隊附同	同	岡島 敬治
弘前豫備病院附	ヨ二等藥劑官	安田 順太郎
第九師團衛生豫備員	ヨ三等藥劑官	○林 常雄
第八師團衛生豫備員	ヨ二等藥劑官	八十島庄五郎
同	同	山崎 清一郎
第九師團衛生豫備員	ヨ三等藥劑官	山崎 彦太郎
金澤豫備病院附	同	鈴木 仙次郎
同	同	高森 滿二郎
同	同	新 次郎
仙臺豫備病院附	ヨ一等軍醫	藤井 伊之吉
第七師團(隊號不明)	ヨ二等軍醫	吉田 義一
后備步兵第五聯隊附	同	大河原 保智
第九師團臨時衛生隊附	同	河村 賢太郎
工兵第九大隊補充中隊	同	梁 貫男
第九師團衛生豫備員	同	島村 豐次郎
第七師團(隊號不明)	ヨ三等軍醫	松田 準
同	同	松本 浩一郎

第七聯隊(隊號不明)

ヨ同

武曹 三郎

同

同

宮越 常二郎

同

同

横井 嘉函

步兵第七聯隊補充大隊

現見習醫官

吉田 播成

同

同

齊藤 賢徳

金澤豫備病院

ヨ見習醫官

石倉 宗嗣

同

同

崎 達郎

同

同

藤井 助雄

同

同

富田 稔磨

同

同

尾倉 一英

同

同

加納 景成

同

ヨ見習藥劑官

林 京二郎

○ヲ附シタルハ戰地ヨリ歸還ノ者



○小川教授 夏猶ほ淺き頃令息を擧げられ自名と戰捷と

に縁みて勝利と名けられたる由、慈愛深き先生の家庭い

やが上に芽出度限りにころ

○越野義三郎氏³³ 婦人科産科醫員たりし氏は去月三日

辭職石川縣檢疫醫となる、是より先き吉見金澤警察醫に

は赤十字社第十一救護班附として山田義忠氏と共に渡清

せられ餘す處た、關屋石川縣警察醫あるのみなりしが、

たま〜鳳至郡鶴川村に赤痢病發生、猖獗殆んど百名に
上らんとせしかば、縣衛生課の希望を容れ遂に氏が轉任
を見るに至りぬ

○谷口長松氏³⁵ 副手として、醫務囑托として久しく婦
人科産科に勤務せられたる、氏には本月二日赤痢病治療
醫として前記鶴川村へ赴任せらる

○八田智証氏³⁵ 昨夏立山越の險を経て甲信の間を跋涉
し、東上せられたる氏には、烟霞の僻禁じ難くてや去八
月九日輕装して白山を踏破せられ、間もなく全二十五日

富士山登を試み不幸急性腸胃加答兒の爲め六合目に達す
るまで五六次の下痢に苦まれたる由なるも奄々たる勢息
の下猶其絶頂に下界の小をかこちつ更に東京へ出て日光

をも巡られたり、歸路は信の淺間を訪ひ下街道よりの豫
定なりしが俄に歸心矢の如くて急行歸院の所、果せる哉
數日を経て木下軍醫より某方面要塞に於て令弟英雄氏戰

死の報を接せらる、令弟は石川縣第一中學校第八回卒業
生にして、さきに三年兵として入營中の所看護手に採用
せられ某聯隊附として出征の途に上られたるもの、即ち

越えて八月二十四日某占領砲臺より更に進んで他の某砲
臺攻撃に際し挺身傷病者救護中午後一時頃敵彈爆發の爲
め前額を粉せられ、あはれ名譽の戰死を遂げられたるな
りといふ

○木下克雄氏⁽³⁰⁾ 去月東良平、北川健三、田中正一、田中一次郎等の諸氏と共に戦地に在りて二等軍醫に昇進せられ出征以來頗る健全服務中の所、小川教授及八田氏に宛時々音信を絶たれざる由、詳しくは通信欄内にあり

○笠篤吉郎氏⁽³⁶⁾ 婦人科産科醫員の氏には今春入科以來小川教授の下に在りて熱心研究に従事せられつゝあるが先きに令息篤逸氏を擧げられ、未だ其喜のたえやらぬに今や一年志願兵として來月早々出發郷里福岡縣に歸られ歩兵第四十七聯隊に入營せらるゝ筈

○太田精一氏⁽³²⁾ 全三等軍醫には第○師團第八補助輸卒隊附として青泥窪に勤務せらるといふ

○島誠郁氏⁽³⁵⁾ 敦賀豫備病院附三等軍醫として勤務中なり

○清水秀夫氏⁽³⁵⁾ 工兵第○隊附の全三等軍醫には出征以來頗る健全にて目下某要塞方面にありといふ

○増田貞吉氏⁽³⁵⁾ 全三等軍醫には第○師團衛生豫備員として全じく某方面にあり

○三野賢吉氏⁽³⁵⁾ 本年六月海軍少軍醫候補生となられたる氏には、其后佐世保海軍病院勤務中の所頃日海上勤務即ち西京丸に乗込まれたり云ふ、去十九日八田氏宛送られたる繪葉書に云く「佐世保三ヶ月の運命に行く秋をあさにして茲に海上勤務に移り申候」と

○堀井吉平氏⁽³⁵⁾ 海軍少軍醫なる氏には先頃横須賀にて製造中の某艦竣工と共に是より乗組まれ海上勤務に従はれつゝあり

○熊澤清隆氏⁽³⁵⁾ 第二部外科醫員なる全氏は去月華蠟の典を擧げられし由

○加納景成氏⁽³⁵⁾ 東京醫科大學耳鼻咽喉科介補として岡田博士の下に日夕親炙せられつゝ、熱心より研鑽せられしが去月第二補充兵として歩兵第○聯隊より召集、幾許もなく見習醫官拜命の上、金澤豫備病院に勤務せらる

○尾倉一英氏⁽³⁵⁾ 富山病院内科に勤務中の所前全斷

○湯本四郎右衛門氏⁽³⁵⁾ 頃日和歌山病院内科醫員として赴任せられたり

○藤浪謙氏⁽³⁵⁾ 廣島に在りて勤務中の全三等軍醫よりは歩兵第○聯隊附として木下軍醫と全じく目下某方面にあり

○宮越常次郎氏⁽³⁵⁾ 久しく動員令なきをうこちつゝありし氏よりは一時内科醫員となられしが去八月第○師團より召集せられ直ちに赴かれぬ

○野口詮太郎氏⁽²⁴⁾ 第○師團第○野戰病院長なる全三等軍醫正には鶴見第○野戰病院長と共に殊に疎腕を振ひ多數の傷病兵を治療せられつゝありしが、脚氣症にかゝられしにかゝはらず其職に竭さるといふ

○關屋林之助氏⁽³¹⁾ 石川縣警察醫なる氏には多年衛生的

事業に孜孜として勉められしは人皆知る所、然るに赤痢病發生以來日夜各郡に出張して是が豫防に尽されつゝありしが本月初旬越野氏と交代して奥能より歸られ石川郡湯谷村に赴かれしに不幸感染する所となり去十二日金澤傳染病院に入院せられたり、聞くが如くんば漸次快方に向はれつゝある由速かに全治されんことを祈る

備考 () 中の數字は卒業年度なり

○佐々木教授の歐行 本校教授佐々木學士は本年九月三日自費を以て横濱解纜歐行の途に着かる吾人は造次顛沛念頭を離れざる教授の懇篤なる叱鞭の一日も早きを冀ふものなり

○勅語捧讀式 日午前八時濟々堂に於て職員生徒整列最敬禮の上恭しく校長の捧讀ありたり

勅語

開戦以降朕ノ陸海軍ハ克ク其忠勇ヲ致シ官僚衆庶其心ヲ一ニシ以テ朕ガ命ヲ遵奉シ着々其歩ヲ進メ今日ニ及ブ、然レトモ前途尙遠遠ナリ堅忍持久益益奉公ノ誠ヲ竭シ以テ終局ノ目的ヲ達スル事ヲ努メヨ

拜誦一番、偏に震念を安じ奉るの完からん事を期すべき也、發奮、精勵、感極まつて又多語あるを見ず

○解剖實習開始 醫學科第二級は已に系統解剖學を終

へたるを以て十月七日より實習を始む。

○醫學科第一級々々會 秋風颯々として宿雨新たに霽れ天は清くして一点の雲翳を止めず、時は十月八日本校濟々堂に、會するもの高安校長を始め諸先生生徒無慮百余名なり、時正に二時一同座につくや石川先生起ちて開會の辭を述べられ終つて高安校長の有益なる快談あり次いで數名の辯士相續きて壇に上り滔々懸河の辯をふるふ、拍手喝采の聲場裡に溢れ滿堂喜色洋洋たり、夕陽將に西に傾かんとし群鴉嗚に急ぐ頃爰を割きて閉會す。

○小原芳雄、上野忠、佐々木巽の

三君を送る

なつかしの君等、秀才を以て幾年を北の寒さに來り岐黃の道に學ばれ又雜誌部に委員として力を盡されしこといかに忘らるべくや、しかも今や各業を卒へ錦を飾りて故山に父母のゑがほに接せられんとす、會者常離とは夢の世の習はしうかし、されど岐黃の道に友として又文事に友として敬愛なる君等よ、君等が活動され研學されんとするは此卒業の後にあらざりしか、是を思へばわれは猥りに泪を以て送らんとするものにあらず、行けや君等の初思を貫徹して、いやが上に戰勝國の帝國と共に其秀才を以て至重なる玉を獲られよ

たゞ恨む上野、佐々木の両君年若うして一度病を得らる、自愛し玉へ君等のために、本校のために、將た國家のため

に、筆を擱けばちぎれくゝの雲間より今宵十三夜の季の名月、折からの虫の音と共に興いと深し（十月二十一日夜雜誌部委員一同に代はりて笹岡芳名記す）

○雜誌部記事

九月二十日、豫算編成會を兼ね濟々堂に於て委員會を開く莊重なる宮田部長の挨拶ありて直ちに豫算編成會に入る原案は周到なる松田、宇野の両氏に依り成り委員協議の上可決

次に各委員の分擔を定め雜誌紙數每號約百頁と決す

醫學科四年級委員 原著（雜纂抄録とも）

全 三年級委員 會報

全 二年級委員 漫録

全 一年級委員 通信

醫學科各委員 藥學部に於ける全部

午後二時半に始まり四時半散會

當日の出席委員 宮田部長、松田、宇野、渡邊、笹岡、

吉野、野村、池部、赤松、岡の諸氏

缺席者は四年有壁及藥學の諸氏

○藥業新報の發刊 該誌は本年十月十一日初めて福井市に呱呱の聲を擧げ遠大の希望と清新の理想とを以て斯學の爲め大に飛揚せんとし一部を本會雜誌部に寄贈せらる其の内容に至りては暫く言はず由來北陸の地此種の雜誌に乏し願くは其の抱負を一貫し以て國益の美果を収めんことを祈る。

○醫事新聞社寄贈 同社は此度醫事新聞百部を本校醫科四年級生一同に贈らる吾人は同社の惠與を謝し併て愈々該社の隆盛を祈る。

○學術部の新設 先に四年生中村德藏君外十數名の建議にかゝる學術部設置の件は去る二十五日の豫算委員會に於て可決し村上教授部長に任せらる。

○十全會茶話會 學校紀念日、卒業式當日に於て十全會は茶話會を開くことと可決せらる。

○雜誌部經常費の節約

曩に交戦のことありしより、時局の趨勢に鑑み、軍資充實の志を以て我が雜誌部と恰かも一回の發刊金額を割いて敢て報國の徹意をいたせり。今又我が十全會が新學年度の豫算を決するに當りても亦前學年度に準じ其の餘剩は擧げて之れを國債に應せむと我が雜誌部も爲めに前學年度の豫算に依ることとなり僅かに人員増加率に對して

第一目 雜誌	費	三六、五五〇	五七、九三〇	三六、五六六	三六、五六八	
第二目 通信	費	一六、六四〇	三、四〇〇	一三、二四〇	一三、二〇〇	
第三目 消耗品	費	七、〇〇〇	三、三四五	三、六五五	三、六五五	
第四目 新聞	費	一一、八八〇	二、二七〇	九、六一〇	九、六一〇	
第五目 製本	費	三、〇〇〇	二、六六〇	〇、三三〇	〇、三三〇	
第六目 雜費	費	一、〇〇〇	四、一六六	五、一六六	五、一六六	
第三項 遊技部		二七、六三三	四、一九五	一四、三三六	一三、三三五	一、〇〇〇
第一目 秋季運動會費	費	一〇〇、〇〇〇	四、七五五	一四、〇七五	一四、〇七五	
第二目 春季運動會費	費	三〇、〇〇〇	三、〇〇〇			
第三目 ロンテニス費	費	四三、〇〇〇	一四、三九〇	二八、六一〇	二八、六一〇	
第四目 フットボール費	費	〇、〇〇〇	〇、六一〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇三三
第五目 端艇基金	費	一、〇〇〇	〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
第四項 劍道部		三〇、〇〇〇	〇	三〇、〇〇〇	二九、七三〇	〇、二七〇
第一目 寒稽古獎勵費	費	一一、〇〇〇	〇、一三〇	一一、一三〇	一一、〇〇〇	〇、一三〇
第二目 春秋大會費	費	一五、〇〇〇	二、三六〇	一七、三六〇	一七、三六〇	
第三目 雜費	費	三、〇〇〇	二、四〇〇	〇、七〇〇	〇、七〇〇	
第五項 柔道部		二六、〇〇〇		二六、〇〇〇	二七、七九四	〇、一〇四
第一目 寒稽古獎勵費	費	一三、〇〇〇		一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	
第二目 春秋大會費	費	一五、〇〇〇	〇、七九四	一五、七九四	一五、七九四	
第三目 雜費	費	一、〇〇〇	〇、九一四	〇、一〇〇	〇、一〇〇	
第六項 弓術部		四、〇〇〇	〇、〇〇〇	四、〇〇〇	三、九五〇	〇、〇五〇
第一目 大會費	費	一五、〇〇〇	〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	

第二目 備品	費	二六、〇〇〇	〇	二六、〇〇〇	二五、九七五	〇、〇二五
第三目 雜費	費	五、〇〇〇	〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	
第七項 會務	費	〇、〇〇〇	〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇	
第一目 備品	費	二、〇〇〇	一、四〇〇	〇、六〇〇	〇、六〇〇	
第二目 印刷	費	二、〇〇〇	〇、〇〇〇	二、〇〇〇	二、〇〇〇	
第三目 消耗品	費	八、〇〇〇	三、九九五	四、〇〇五	四、〇〇五	
第四目 雜費	費	五、〇〇〇	〇、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	
第五目 有功賞費	費	三、〇〇〇	三、〇〇〇	〇	〇	
第八項 豫備	費	五五、六〇〇	四、五五四	三三、〇四六	三、五〇〇	九、五四六
第一目 豫備費	費	五五、六〇〇	四、五五四	三三、〇四六	三、五〇〇	九、五四六
經常部合計		七六、三三三	一七、八八八	六七、四四五	五九、〇三九	一七、四一六
臨時部						
第一款 雜誌	費	一四、〇七五		一四、〇七五	一四、〇七五	
第一項 雜誌	費	一四、〇七五		一四、〇七五	一四、〇七五	
第一目 書棚購求費	費	一四、〇七五		一四、〇七五	一四、〇七五	
臨時部合計		一四、〇七五		一四、〇七五	一四、〇七五	
總計		八〇、三〇八	一七、八八八	六二、四二〇	五四、一一四	一七、三〇六

○三十六年度十全會校外特別會員
會費收支決算報告

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校 十全會收入	九一八、八四九
第一項	特別會員寄付金	一一九、九七六
第二項	通常會員寄付金	七〇二、〇〇〇
第三項	利 金	一七、五〇〇
第四項	繰 越 金	七七、八七三
第五項	雜 収 入	一、五〇〇
合 計		九一八、八四九

三十七年度十全會収支豫算書

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校 十全會支出	九一八、八四九
第一項	講 話 部	一七、五〇〇
第二項	雜 誌 部	三三七、四七六
第三項	遊 技 部	一五二、五九三
第四項	劍 道 部	二二、〇〇〇
第五項	柔 道 部	二二、〇〇〇
第六項	弓 術 部	二四、〇〇〇
第七項	會 務 部	七〇、〇〇〇
第八項	學 術 實 習 部	六〇、〇〇〇

科	目	豫算決定額
第九項	豫 備 費	七〇、一三〇
第十項	國庫債券應募費	一四三、一五〇
合 計		九一八、八四九

三十七年度金澤醫學專門學校十全會資金支出豫算書

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校 十全會資金	四〇九、一五〇
第一項	資 金	四〇九、一五〇

但三十六年度ニ國債額面七百圓ヲ價格六百六拾八圓五拾錢ニテ應募シ金四百貳圓五拾錢ヲ拂込ミ殘金貳百六拾六圓ハ繰越金トシテ本年度ニ於テ拂込ヲ要ス
三十七年度ニ於テハ豫算殘額金百四拾參圓拾五錢ヲ以テ第三回國債額面百五拾圓應募ノ見込

三十七年度十全會校外特別會員會費收入豫算書

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校十 全會校外特別會員費	五〇八、九七三
第一項	校外特別會員會費	四〇三、八〇〇
第二項	利 金	三、九六〇
第三項	繰 越 金	一〇一、二一三

(通信)

合	計	五〇八九七三
---	---	--------

三十七年度十全會校外特別會員會費支出豫算書

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校 十全會校外特別會 員費	二二三、三〇〇
第一項	校外特別會員費	二〇九、〇七〇
第二項	豫備費	二二、三三〇
合	計	二二五、三〇〇

三十七年度十全會校外特別會員資金豫算書

科	目	豫算決定額
第一款	金澤醫學專門學校 十全會校外特別會 員資金	二四、七一三
第一項	資金	二四、七一三
合	計	二四、七一三

但前年度剩餘金ノ内本文ノ通り組入

金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費中ヨリ國庫債券應募決議案

一、第三回國庫債券額面貳百五拾圓 應募高

理由

時局ヲ鑑ミ貯蓄預金ヨリ前年度未納會費及三十八年度

以后ノ前納會費并ニ本年度ニ於テ資金へ組入レタル等ノ額ヲ以テ本文ノ通り應募爾后毎年度經費支出殘金ヲ以テ逐次補充ノ上資金トス

* * * * *

* * * * *

通信

○佐々木教授の通信

(シンガポール發 小川教授宛)

豫ての如く九月三日横濱出帆同十八日午後七時「シンガポール」着航海里程三千五百マイル將に航路の半に達せんとせり途上各碇泊地上陸、事々物々新奇にして到底秃筆の尽す所に非ず只其一般を記し以て余が消息を報ずるに過ぎず

乗船は Gneisenau と稱し始めて日本に渡航し來りたる獨乙船にして噸數は八千新式美麗の良船あるのみならず速力大にして上中等乗船滿員にして暑中の乗船は甚だ困難なり

同行者ハなき積りなりしに船中にて岡山縣の小川劔三郎京都大學法科の神戸正雄の二君に會せり共に獨乙國留學

生にして小生よりも十年斗若き人なり

船室は二人詰と四人詰とあり小生と小川君とは同室にて四人詰に入れり廣さは二坪位にして内一坪之寢臺棚に占められ残る一坪内に洗面臺鏡物入等なり此一坪内の廣き場所にて衣服の着用荷物の出入其他日常の仕事せざるべからず故に一人が荷物の仕末などする時は他の者は室内に入る事能ず實に窮屈此上もなき事あり初めは長崎迄は小川と二人のみにて共に日本人の事故遠慮もなかつたが長崎よりは獨乙語も日本語も通せざる英人らしき者二人入り來り語は通せず裸体は見せる事は出來ず誠に窮屈となれり幸にも上海にて二人共下りやれ喜しと思ふ間もなく獨乙人一名復來れり此男は郵便に従事し居る人にて若き活潑の人故獨乙稽古の便を得たり此人は「ポートサイド」にて下る人なり又香港より一名の英人入り來れり愈きつちり詰切りになつた衣服を掛ける所の四隅に一ついつあるけれど一箇一人では中々足らず自他の衣服が重り合ふて堆高く掛てをるなど余り良き心持ぢしない

船内生活は右の様な仕末だから到底室内に居る事は出來ない殊に蒸暑いから出て二階の喫煙室に入れば男女両側に室が別れて男室は比較的廣けれど二十人も入れば満員だから長く居る事は出來ないだから三階の甲板に上つて居る此處にも各自「ソーフア」が並でをる長崎では僅か二

十余箇だつたが追々増加して五六十にも達し散歩する事も出來なくなつた然し一番冷敷くから多くは甲板上に居り用のある毎に下階に下ると云ふ有様で始めの内は一日數十回も上下した爲めに腹が空しく食事を待ち兼ねる有様だから船中では中々仕事か出來ない甲板へこの上下と食堂に入るとの毎日の仕事さ。

食物は勿論洋食だが元來洋食を好まぬ小生でも中々食はる十七日間今日に至る迄食堂を欠席した事がなきのみならず長崎上海上陸の日本食よりも甘い特に其度數が多くて朝食午前八時晝十二時晚飯六時の三食の外に朝六時午前十時午后三時及夜八時の四間「コーヒー」、鹽リモ、パン、サラードの如きもの代る／＼持て來て來るだから前にも云ふ通り食事と甲板との上下にて日程を満たして居ると云ふ有様でこんな贅澤しては獨乙へ着後の經濟が心配である又た遊び癖のつくにも困てる。

退屈は豫ての覺悟にて多少の退屈凌ぎの準備もして來たが右の様な有様で少しも退屈しない特ま一行三人と來て居るから少しも外國船に乗つて居る様な心持がない所が「シンガポール」近くから一同退屈を詠へ出したのみならず食慾も減じて來た是れに三理由がある第一は眞の退屈では是れ迄は二日以内の航海で上陸が出來たが今回は四晝夜以上上海上續きた第二は甲板上「ソーフア」満載の有様

で散歩の自由を失ふた第三は船内生活に慣れ猥りに甲板を上下する事少なくなつた所で讀残りの新聞雜誌小説等を見ても頭が重くなるから神戸が花合せを造りて一昨日から始めたが小生は負け續けて「ビール」を取る事になつた所で一案を起した曰くさ僕は賭ける事は好まないけれども明日は亡父の命日だから御馳走をしやうと言ふて昨夜(十七日)は喫烟室の一隅に岐阜提灯を点し「ビール」を馳走し福神漬を開き又た日本茶を飲ました是等は神戸にて岐阜阿兄が投じて呉れた賜物だ。

友人は同行者の外船内にて大分出來た先づ横神間にて「カルカッタ」の商人と知り怪しき日本語をあやつり神戸が英語の通辯をした次で喫烟室掛の「ボーイ」になじみ毎日何回となく語を交えて居る又日本海軍を觀察しに來た軍人とも近附きになつた次で上海から乗船した同室の獨乙人も中々面白い又上海から乗た米人で新聞記者らしきものが日本語で話し掛た此人は能く獨乙語を話し少し病氣があるので毎日話掛る又英人で獨乙語は出來ざるも日本語の出來る「シンガポール」在留の工兵士官にも近附きになつた御蔭で「シンガポール」上陸の案内も分つた其他日本語を話す支那人獨乙語を話す支那人又獨乙人にも二人近附か出來た此様子では大分交際が上達したらしい又獨乙語も伯林着迄には毫も差支なきよ至るならんとは

ちとほららしいね。

日本人では長崎から唐津炭坑手代の人の様で英語を能くする坂田某を知り上海及香港の案内者を得大に便なりし又上海より向後某福州師範學校教授に會ひ福州近傍上陸の便を得たり。

氣候は幸に宜敷横濱出帆の當日風雨ありしと「シンガポール」着の前日(十七日)に風ありし外は風波なく海上平穩なるのみならず暑氣も存分甚しからず船室以外は暑い事なしと云ふも可なり赤道近傍の此地でも余り暑くない天氣も宜しく只だ香港碇泊中時々濛雨ありし外は先づ晴天と云ふも宜い蓋しこんな好天氣と珍しいと云ふ事だ殊に台灣海峽は大低荒れるろいぞ。

上陸は停船毎にして見たいと云ふは前述の如く船室内では安眠も出來ず又た退屈もあり又上陸すれば珍しい事が多いからだ所が上陸が入費の掛ると案内及言語も分らぬ不便がある第一神戸にて岐阜阿兄に誘はれて舞子に行き長崎では新築病院を見た是迄は内地だから宜いが是れから上海香港「シンガポール」と來ると語は通せない獨語は勿論日本語も分らん出發の際は獨乙の事は多少調べたが上陸當時の事は更に念頭に置なかつた上陸は体休めと見物だが醫學研究が目的だから見聞を廣めるに、見物も必要だが少しも考へなかつた然し夫れも二度と來る事が

出來ないかも知れん故必要かも知れん（歸途米國にも廻れば）處が幸にも前に言ふた唐津の坂田某が長崎から乗込み香港迄行ふと云ふから香港迄は都合も宜かつた儂此「シンガポール」に來たら最早案内者が無い海岸では英語も通せんと云ふ又町迄は三マイルもあり是非馬車に乗らねばならぬ困て居ると前に述べた日本語に通ずる英國士官が「シンガポール」迄行くと云ふので此人が日本旅館迄案内してやると云ふ處が此「シンガポール」に着いたのが午后六時半で日が暮れてをるから英人は町へは行かぬ海岸の兵舎に今夜泊ると云ふ夫れで此人が馬車丈け雇ふて呉れて昨夜無事此日本旅館に着いた之れは外國人に案内してもろ一た始めです是れからはこんな事がありましたやうけれど最早日本旅館がないから段々面白い談話もありましたやう。

「シンガポール」松尾旅館

九月十八日

佐々木 達

小川勝陳殿

各諸君、各科諸君、

先月來手面を出させる事幾百通に及ぶも一本も受け取る事が出來ない學校の摸樣日本の摸樣は少しも分らない手紙が甚だ慕はしい未だ到着の報なきも左記へ御差出し相成らば到着早々樂んで拜讀致します

Via Amerika

an

Herrn Dr. med. Y. Sakaki. (榑保三郎君、事)

bei Frau goedtre

Alexanderufer N°111

Berlin

獨乙國伯林府

Deutschland

佐々木達殿行

○金子教授の通信

(九月十二日發)
(十全會宛)

拜啓扱て久しく御無沙汰仕候諸君愈々御清福御勤學の御事と遙賀仕候不相變雜誌御送り被下たのしく拜讀仕候老生追て當地引拂歸朝の途に就き可申されば十二月初旬には再び諸君に御面晤可仕佐々木醫學士には今回歐行の御計畫新聞にて承知仕候多分途中往違ひに可相成殘念に存候先は久々御伺旁々匆々敬具

○葉書通信第一回

(八月六日發)
(十全會宛)

在ライプチヒ大學 竹中繁次郎
僕は當校出身の一人にて目下獨乙ライプチヒ大學に勉強し居るものです爾來諸君と本誌上に見えようとの考で第

一回の通信を送るのです。

元來獨乙へ來れば自ら勉強させて呉れる様に思て諸君は居るかも知れぬけれども何處に居ても勉強せざれば上達せぬ者です殊に當地の如きは外國人に對し放任主義にて吾人の案外に思ふた点も澤山あるです然し内科正教授は Kirschmann 氏にして Klinik を擔當し Hofmann 氏 Poliklinik を擔當してをります、外科は Trendelenburg 氏、婦人科産科は Zweifel 氏、眼科は Sattler 氏該科の Direktor です、其他有名なる Hering 氏(生理) Marchand 氏(病理)、Boehm 氏(藥物)、Fleehsig 氏(精神病)、Dieck 氏(解剖)、Willemanns 氏(小兒外科)の pathoholoz 氏(局所解剖)等各科に勤めて居ます

His 氏當地大學の解剖の Direktor でしたが本年早々彼地の人となつたのだ我學界の爲は惜んで余りある出來事でした、其後 Direktor の坐席は欠員となつて居て信ぜべき説によれば他の大學より此席を補ふ人は來るならむと云ふことです

又獨乙大學に入學出來得る資格は尋中卒業と云ふ事です留學生中にも當地へ來て困て居る人もあるろうです然し入學する時よりも Doctorexamen を受くるときに委しく調べるのです

獨乙にと Doctorexamen の外 Staatexamen ありまして日

本と異なり Staatexamen を受けられバ醫士たるの資格はないのです(次回に報ずべし)然し Doctor 試験前に國家試験を受くるを例として居ります

S. Takenaka

Leipzig, Höhenzollern strasse 8 I

Deutschland

○木下克雄君の通信第一 (小川教授及八田氏宛)

(一)前畧御地出發の際は御熱心なる御見送を辱ふし御蔭に依り六月三十日午後九時十一分廣島に着仕候

金澤發「來年もまた來て聞かん時鳥」

福井驛にて「常よりも故郷戀しく忍ばれて涙フクキの

今日の切なさ」

何にせよ御地出發以來着廣迄沿道の士女殆んど狂せん斗りの熱誠を以て万歳聲裡に送られ各將卒共々無限の感慨に咽び候一寸御笑まで左に

瀬田の唐橋を見損ひて

「見て行くと思ひも橋と夢の間に過ぎて多へタのカラ橋と云ふ」

江州に名高き逢阪の關にて八年前に分れし知人よ出逢ひて

「かねてより近江へ」と思ひしにやうへこゝに
逢坂の關

七月一日

廣島にて

(二)拜啓去二十五日出の御手紙一昨日受領繰返へし〳〵拜見仕り御蔭にて御地の事情悉しく承知致候小川先生越野兄不相變御健勝の由何よりの事と奉賀候(中畧)

遼東一帯山又山而も山には木なく川に水なく只僅に山間の畑地に粟と唐黍と稗を見るのみ涼を取らんにも樹蔭なく鑠金の暑熱に身を曝され漸く一天幕下に蠢爾たるの状兎角戦争は斯うした者かと思ひ乍ら日に幾度となく嗚呼〳〵を繰返へし居候さて前便の如く七月廿四日〳〵上陸後一日の休養もなく急行敵の第一線なる某砲壘に向ふて前進し早くも廿六日午前五時頃より砲火を開始せしが何よせよ久しく防禦工事に従事し居りしこととて中々陥落の運ひに至らず漸く廿八日午前に至り敵兵敗走し我軍之れを追撃して終に遼東第一の高山たる〳〵を占領す、次で敵は第二線とも云ふべき〳〵附近の高地を據り頑固に抵抗せしも我軍の精銳は敵し得ず復敗走し三十日全く全地占領現に本日も尙此地に露營罷在候此戦や第〳〵師團は中央第〳〵師團は右翼第〳〵師團は左翼となり劇戦の事とて死傷者多數にて三軍全体にて〳〵以上に及び我第〳〵大隊のみにても

二百四十名に上り候一時は中々凄しき有様にて目も當てられぬ斗り小生も砲彈の爆發に逢ひたる事數度三十日には小銃彈に見舞はれ候も幸に前方二間斗りの石に當りし事とて勢を失ひ餘力にて左靴に中りしも身は微傷だに受けず今に其丸は紀念として保存致居候令弟友雄氏には軍帽を打抜かれ一部毛髮の焼けたるものあり今一寸も下らば頭蓋を打たるゝ所なりしと天佑なる哉是又微傷も受けず氏の被り居らるゝ帽子ころ末代の紀念と存候

廿六日より三十日に至りては飲むに水なく食ふに食なく只兩三回飯ありし外携帶のビスケットにて命を縛ぎ候此後も屢出逢ふとかと思へば餘り良き心持も無之候支那人及支那地の不潔なる譬ふるに物なく眞に豚同様に内地乞食非人にて眞逆これ程にはなく候而も支那人の平氣なる物か蠅か見分難きまでのものなるをも意とせず地上に落ちて既ら腐敗し掛りをるものは固より何んでもかでも食せずと云ふ事なく葱蒜其他野生のものは一も煮る事なく生の儘にて凡て食し居るも其病氣に罹らぬは不思議に候我軍中赤痢、腸加答兒、脚氣中々に〳〵益蔓延の兆あり小生も現に苦しみつゝある次第にて早く〳〵へでも行かは少しは人間の心地となるかと日待に待居るも如何せん〳〵の背面防禦と要

害堅固にして近き難く「サーチャイト」は我軍の行動を妨げ晝の無暗に砲彈を放ち場所選ず落下し危険此上もなし二十四瓏知砲の破片の如き中々小生の如きは持ち上ぐる事も能はず候然し我軍も着々攻撃の準備成りいよく近き内に總攻撃に取りかゝる由に候へん敵の運命も余り遠からずと存候何卒本國の方でも大に力癩を入れて御氣配被下度候敵斥候との衝突位と一向に珍らしくなく今での砲彈の音も慣れて内地で火花を上ぐる音程にも思はず候其本攻撃にもならば餘程の見物なるべく某々山の諸砲臺が崩るゝ音も果して何時か嗚呼待遠く候定めて一週後と存候(下畧)

八月十二日午后四時遼東半島徐○屯南方畑地の天幕内にて下り腹を擦りつゝ蠅を拂ふて之を記す

右は八田氏宛に送られたるものなるが氏が許に達したるは實に總攻撃正に酣なるの頃なりき而も此攻撃の終に近く令弟友雄氏之戰死の光榮を擔はれ木下軍醫よりのろが詳報は越えて九月六日亦氏の許に達せし由なるも今は軍機に觸るゝ恐あるにより之を畧す

然るに數日前同じく八田氏宛の端書に依れば

目下或る任務の爲め占領砲臺内にあり眼前友雄君忠死の跡を見て感慨に堪はず不日任務終るべければ更に詳報を呈せん我れ幸に健全小川先生始め諸兄の健康を祈

る」と

○木下克雄君通信第二 (十月一日戰地發)

(小川教授及八田氏)

蕭啓秋冷中々に深く相成り殊に當地の如きは晝熱夜冷從て晝夜の差異甚しく日によりては夜間に於ても恰も内地の十一月末頃の寒さ少からず候、之か爲め携帶天幕中に起臥する身も取りては冬に入りての寒さの程今より思ひ忍ばれ申候、數日前より冬褌袴下を給せられ袴は凡て冬用のものとなり衣は午後五時より翌朝九時頃まで冬衣を着し居候、其外赤毛布一枚宛と外套にて就眠致居候も夜中寒さの爲に目覺めヒクヒクと震ふことも少からず候、然し寒氣増すに従て追々防寒用のいろゝの物支給せらるゝ由なれ共ドーセ寒氣との戰さものと存候、内地殊も金澤の如きは秋色深く大乘寺山の茸狩遊山、兼六公園の探秋、各社の秋季祭、落鮎釣の樂しみ、サイクリストの自轉車乗廻りし等各人日も是れ足らざるの有様ならんと聞ある度に故國の空のみ眺み居り候

出征當時は諸給與十分ならず大に困苦致候も此頃は甚だ良好となり、一日一回と必ず糞たもの當り酒も時々當り煙草もチヨイヒ給せられ其外酒保ある故煙草、酒は充分に候、生着の如きも支那人賣に來り一週若くは五日に

一度位は給與相成り生牛肉生豚肉等は常に食し中には飽きたるものさへ有之候、食事の上に餘り不自由を感ぜざるは一に大隊本部に在る所以と存候、前進部隊や攻撃の際なれば糝や、重焼パンを噛ること多く候従て一日間一滴の水も口にせざる場合不少候、

過日來我が隊は某古領砲臺の守備として勤務し小生も履行して服務罷在候令弟友雄氏戦死の場所を同前に見て前事を追懐し感慨殊に禁じ能はず候、氏戦死後今に補充もせられず事務上大に差支を覺ゆ困難罷在候、有力の人を失ひし事とて不便も亦一層に候、氏の致命傷は頭蓋の挫滅より由るものにして當時の第二回の進撃を行ひ小生等は後方の仮縛帶所勤務に従ひ居候、各大隊より一名宛看護手屬行したる際に友雄氏は進んで其任に當り何時になく吾等一同に後事を托せらるゝなど今より思へば眞に自ら死を期して事に當られたるものと存居候、(中略)、東京報知新聞九月十三日のものに記載ありし事柄は小生も閱讀致候(金澤及岐阜の新聞にもあるを見たり)従軍記者の報告せしものと存候が小生より提出せし事項其儘に候或夜守備砲臺側面の一角に於て味方の攻撃あり、砲彈爆裂、小銃彈機關砲の音、探照燈の光輝、爆裂彈の破裂、探照光彈の照射眞に慄ましきものにて頭上に於てバン／＼バチ／＼シウ／＼の音天柱倒れ地軸碎くる如き殆んど耳

も聳せん斗にて僅少の死傷者を出したるのみにて造作もなく或一部を奪取致候、(中略)

過日小川先生より繪端書被下難有まだ御禮も申さず失禮致居候宜敷御傳可被下候、

小生當地へ來りて以來病魔に襲はるゝこと三回に及び候最初は單に下痢にて數日にて治癒第二回は輕症の赤痢にて十日斗にて癒へ第三回は同じく赤痢にて幸に輕症のことゝて二週間に癒へ今現る病后保養中に候、随分上闇にうるさく身体疲憊致候へとも負傷でもなきに只輕症の赤痢にて入院する様のおとでは甚た残念と終に自療今日にては全快の有様偏に御放慮願上候、一体赤痢、脚氣は鳥○數に上り候も赤痢は總じて輕症直ぐ直り候、脚氣は鳥渡直り難く○○○へ后送したるものゝ中にて死亡する者も甚た不少と申候、最早小生も病氣に罹り度なきものゝて何より攝生肝要と存居候、幕營中乱筆御判讀被下度候
於○○○○○

○田中正一君の通信

(十月十日戰地發 八田氏宛)

拜啓愈御清光奉賀候愚生亦相變らず壯健に罷在候間御放神被下度候、去九月三十日○○港解纜し海上無事にて六日○○○に上陸即日一里余の行軍をなし○○○と云ふ最

劣等の一小村落に舍營仕候、此處に當分駐軍可致と存候、日淺く候へば御話致す程の事無之只屢聞ゆる旅順の砲聲と直ぐ南方の丘より見ゆる數多の封鎖艦隊と掃海事業とは眞に戰場と覺候(下署)

○田中一次郎君第一回通信

(七月十七日廣島發
金澤病院院長等宛)

謹啓其後は御無沙汰申候向洋村轉營後は宇品港も野津大山大將閣下を御見送り申候序に信濃丸を參觀致候十四日午后大島師團長殿の乗船は此信濃丸の由に御座候昨日は吳港に參り候處途中にて東君に會し共に海軍病院を參觀仕り院長博士鈴木孝之助殿の案内にて戰時設備の傳染病室を精細に説明致され之れ専ら院長自身に設計せられたるもの、由に御座候病室參觀の際室附勤務の當校出身小山田少軍醫候補生に面會仕候患者の多數は戰地の傷病者にして水雷艇乗組員小軍醫一名も見受申候病室及食物の點は到底陸軍の比にあらず經費余裕の關係かと推察仕候歸營後明十八日第二野戰病院は宇品に於て門司丸乗船すべし旨達せられ愈内地港灣出發と確定仕り候之よりは本舞臺殊に第九師團は○正面攻撃に参加するとの囀専らに有之一層愉快に感じ申候

上陸後は郵便物の制限もあり屢々御通報致兼候際も可有

之候得共折あらば通信を怠らざる心算に有之候先は御報道迄斯の如くに御座候敬具

第二信 (八月五日戰地發)

七月二十四日○○に上陸滿州の土を踏み申候爾來今日に至る迄殆ど露營の仕詰めに有之候安子嶺干大山の戰鬪共に參與仕り二回病院開設傷病者を收容加療せし事○○有余に及び申候傷者は重に銃創にして少數は砲創に御座候又銃創は下肢に多くして骨折を兼ねるものは多からず候只だ露兵極めて頑固に抵抗せし爲にや或は傳聞する如く一步も退く時には死刑に處すとの命を遵奉せし爲にや一人にして數個所の銃創を受けたるものも多數有之候治療の方針は殺菌防腐法により乾燥處置をとり居り候得共到底不完全は免れず候得共化膿は少數に有之候但し蛆の多き爲め出血を以て汚染せられしものは直に産卵し蛆蟲の蠢々たるを見るもの有之殊に事情已む事を得ずして四五日にして漸く一回の綑帶交替をなし得ると得ざるとあり名譽の傷病者に對して誠に氣の毒千萬と存候目下休養中數日后より更に活動する由に御座候先は近況御報知迄勿々頓首

第三信 (九月四日戰地發)

謹啓其後は不圖御無沙汰申候佐々木先生は今回歐州に御遊學遊はされ候由御奮發の事と奉恐察候○○の包圍も安

子嶺于大山の占領に次で去月〇〇日より本攻撃に相成り多大の生靈を賭して第九師團の目的の〇〇〇個を占領致し第三軍全般の名譽を維持致居候己に御承知の事と存候得共敵地は名も負ふ天嶮に十年來の工事を加へ堡壘の如きは極めて厚き鉄板を以て其前壁及天蓋となし前壁には僅に四角形の銃眼を供へ敵は其内に潜み攻撃軍は百米突余の坂面を通せざれば之に達する事を得ず坂の前面には二個所の鉄條網あり其等の中間には深き塹溝と地雷とを備へ容易に迫り能はざるのみならず我砲撃は鉄板を破る力乏しく要塞戰の常とは言ひながら非常なる困苦を重ね漸く〇〇を得たる狀況に有之候攻撃に先ち〇〇〇は部下一般に決心のある處を示し一兵卒たりとも生存する者あらば必ず〇〇〇目的の〇〇〇を乗取れよ多年口にしたる一死報國の秋は今日にありと懦夫も起たざるもなきの訓諭を發せられ候。

攻撃は一時中止せられ候も晝間は砲撃絶間なく夜は探照燈と打上げ花火の如き光弾とを以て暗處を照し時々不意の襲撃をなす事あり爲に第一線にある兵士は一刻も夢醒たまるの時なく小便すら安閑と足す能はず雨降る日水は濠内臍部に達する迄に滯溜し上身を延せば頭部は地上より露出して忽ち敵に狙撃せらるの危険あり腰をかごめたる儘一日を送るなど中々尋常一様なる勞苦とは思はれず候

吾々後方部隊は仮令今回の如く傷病者〇〇〇〇〇〇名を收容加療せしと戦線の勞苦に比すれば何の事も御座なく候一昨日遼陽は陥落仕り候由後の鳥は先となり候も大々の愉快に有之帝國万々歳に御座候

〇渡邊十治君私信

(十月十日戰地發
宮田教授宛)

前畧遼陽の戰鬪は十有二日に亘り兵の疲憊思の外に有之候此の戰爭中第一軍第二師團の最激戰なせしは砦子溝及黑英臺に御座候前地は第〇聯隊か苦戰場にして聯隊長戰死せられしは此役に候へば他は大低御察被下度候後地は遼陽附近敵の退却掩護の爲に有力なる部隊の排置しありたる所にして始め第一軍の一部との交戰混戰と申さんよりは寧ろ苦戰の狀況に陥りたれども後には第一軍全部にて攻撃を續け申候之れにても尙ほ思はしき程の攻撃も出來ず誠に残念至極に御座候これが爲に外國にては黑鳩公とよく退却を全ふし日本軍の追撃は緩なりきとの誹は有之候へ共左迄けなしたるものには御座なく勝利は矢張勝利に相違なく只だ初の目的を全く貫き得ざりしものと臆測仕候

太子河を殆ど經界線として山地平原の分れ目に御座候韓國上陸以來山間谿地道ならぬ道迄行軍し續けたる事なれ

ば一時も早く平野に出でたき希望は苦地より樂地に入らんとする程に候ひし是れ小生のみならず百人が百人迄同一の事と存候又遼陽は平原中にありて此地がまた一大目的地たるを覺悟せし譯合にてよるなるべし然るに待て來て見れば聞く程になく呆氣なきものにて一見眼を遮るものなく届したる心が延々する心地すれども飲料水は不良にして多くは濁水にして加ふるに水量少く又た薪炭に甚だ乏しく舊の古巢戀しき感つくづく起り申候是れより愈寒氣に向ひ候はゞ井水凍結する由其際に至らば大部隊の事故各部隊其内地にありては夢にも見れぬ非常なる困難を嘗むるに至るべくと存居候近來平地に來りてより各隊其脚氣患者續出し入院後送の運に至るもの少からず候小生も亦輕症ながら此の病に苦痛を重ね不幸にも入院の味を嘗むる境遇と相成残念至極に御座候も何とも致方なく只だ運を天に任するより外無之候諦め居り候昨夕少しく暖氣に傾き候へ共五六日前には非常に寒く夜最低零下四度を示し朝起くれば桶に汲置きし水は全く永結仕り候大陸は暑き時は非常に暑く寒き時は酷寒を極むるとは定まりなから實に驚歎仕り候十月と内地と於ては秋山賑ふ頃(頃)に御座候

我衛生隊にて最多數收容せしは黑英臺の戰役にして三日二晩寸暇なき作業をなし閉鎖時には實に患者數七百七十

九名の多きに上り申候草々頓首

○在戰地會員羽田信次君通信

(九月二十七日發山砲教授宛)

謹呈仕候毎々新聞紙御惠贈に相成り玉翰も折々頂戴仕御多忙中何とも恐縮御禮の申上様も無之候萬一生還の折もあらば陣中此御厚意が如何に多大安慰を小生が拜受したるかを御物語可致候只々目下水のある處へは半里薪のある山へは一里の上古時代の穴住居何も送り申すものも無之奉謝奉謝と申すより外は無之候

(中略)酸鼻とか慘憺とか申候言葉己よ過ぎ去りて目下は一種の感情に支配せられ内地ではやれ〇〇が取れたの〇〇が取れたのと丸で野戰の様な心掛て無茶苦茶に書き立てるのは甚だ不快に誰れも思ひ居り候内地よりの或る文信に〇〇閣下が〇〇たとか言ふ風説ありこの事何事々天下一の大馬鹿者かかる風説者ころ眞に身体をずたずたに斬つても飽き足らぬ奴目下通信は一一検査され此現狀を先生に委細御報申上兼候が上は〇〇より下は輸卒に至るまで其困難辛苦軍人の素より期するところとは言ひながら實よ有の儘に話したらば誠とは思はれぬ悲慘たるもの〇〇〇ともあるふ方が隊の生活に等しき御境界野

に晒され夜は露に寝ぬ敵來と見れば彈雨の中を往來して指揮され居る勇狀無比なる有様には全軍皆感泣せざるなし之を以て○呼はり誠に腹が立てならず元來負傷した兵などは激戦の最中に後送され實際の狀況は戦争后又明にして激戦中は何が何やら殆ど不明なり然るに種々の臆説を喋々内地に述べて萬人を感はす甚だ以て寒心すべき事と存候

戦は分一刻に形勢の變るもの然るを後送幾十日を費したる者が元の戦場の模様より現場を想像して人に公言するどは沙汰の限り實際今穴住居る小生等○が取れたとか○が取れたとか言ふ新聞を見る度毎に腹が立ち申候

何日頃なりけむ先生へ申上候通り八月中に万一○陥落の報がなければ少くとも○を要せむと申候通り凡ての経過が實際此言の通りに有之目下千辛万苦して作業に従事しつゝあり誠に内地にても待遠ふ感し居り候はんも七年の經營になれる堅壘と思へば實際無理ならぬ次第に有之候併し○と申候砲壘は○のあるところにして敵が死守せし處漸く○日に我師團が畧取仕候○は驚くべき大砲壘三寸余の鉄板に二尺角の材木を上敷き其上より土を三尺置き前には鉄板を張りて銃砲丸孔を有せり「どうしてこれが破壊し得んか」日々苦心慘憺して研

究せられつゝあるは實に此唯一の問題に有之候例の滿洲大陸の風露營の夢を破り手も足もちぎれる位寒く候未だ夏服の其儘夜余り寒くして寝られぬ儘起き出で、見れば白妙の雪にはあらねど露にて眞白に潤り此所彼所穴の中にて「朝日に輝く日の御旗」と軍歌を歌ひ居り候只誠に誠に斷腸の思ひ有之候

○は多少なき日とては一日もなく○を見ぬ日は一日も無之況んや過日の戦鬪にて累々たる○より簇生せる蛆蟲は露營の枕によじ來りひやりとするもの皆蛆に有之惡臭鼻を衝て來り爲に線香を立て、防ぎ居り候滿山皆○を以て埋められたるもの故に有之候此穴の中にし居り候間も敵彈は前後左右に落ち夫れは夫れは危險千萬に有之候○軍醫は勤務中負傷致候山又守備するもの頭から足迄土だらけ飯は握飯一つに梅干なり水は半里行かねば得ず然れども一意専心報國を期し堅忍克く作業に従事する我軍は實に世界第一と存候(下畧)

○山田義忠君通信

(九月六日風城兵站病院赤十字社第百十一救護班發金澤病院外科部宛)

前畧遼陽も一昨日陥落致候事とて當地市内城内の景氣は例へるもの無之狂氣の有様に候芝居、相撲、支那人の舞

踏、園遊會等有之支那人の家屋には何れも支那巡羅の命令に因りて日本國旗を出して大勝を祝し今や恰も日本の屬國たるの觀を呈し居り候。

安東縣の景氣は亦た格別よして鐵道隊(驛夫のみ二千人力り來り居り候)木挽隊(兵營鐵道ヲ造ルモノ)郵便電信隊等日本人無數にて恰も日本市内の觀あり西洋料理日本料理店等も多數有之彼の群蠅の如く追へども去らざる紅裙隊の少數も見受け申候

當市内に支那人の寫眞師有之(ガビ子)板二圓燒増は一枚五十錢に御座候

脚氣患者多く小生のみにて二百六十名治療致居候但し電氣の無きと困り入り候

昨日恤兵として煙草三箇菓子ハンカチーフを呉れ候煙草の表紙のみ御送附申候

本院には患者一千三百名(内六百戰傷)第一分院には三百六十第二分院には(小生の預り分)二百六十名收容致し居り候

右之如き多數の患者と對し醫員と院長一人(事務ノミニテ治療セズ)赤十字醫員四名見習醫官一名にて治療に従事するものは五名に候
露助の營養惡しき服裝の貧しきには一驚仕候將校と雖も憐れなるものに御座候(後畧)

公文

○文部省訓令第八號

北海道廳 府縣 直轄學校

學生生徒等ノ使用スル「コピールピオレット」「ルラビオレット」「ヨハン、コピール」「ハッ、ツエ、クルツ、コピール」等ノ記號アル紫色鉛筆ハ其製造ノ原料ニ有害ノ色素ヲ包有スルカ故ニ其ノ破片又ハ溶液ノ眼中ニ入ルトキハ激烈ナル毒作用ヲ呈シ竟ニ不治ノ眼疾ニ陥ルコトアリ仍テ幼稚園及小學校等ノ兒童ニハ之ガ使用ヲ禁ジ其他ノ學校ノ學生生徒ニアリテハ必要欠クベカラサル場合ニ限り之レヲ使用セシムルコトヲ得ルト雖モ其使用上ニ周密ノ注意ヲ爲サシムヘシ

明治三十七年八月九日

文部大臣 久保田 讓

○文部省令第十八號

明治三十三年文部省令第四號學生生徒身體檢査規定申左ノ通改正ス

明治三十七年九月十日

文部大臣 久保田 讓

第一條第一項ヲ左ノ如ク改ム

學生生徒ノ身體檢査ハ毎年四月ニ於テ之ヲ施行スベシ

第四條第二項ヲ削ル

第五條第一項第四號ヲ左ノ如ク改ム

體重ハ著位ノ儘測定シタル時ハ其著衣ノ重量ヲ全重量ヨリ除去スベシ

第七條第二項左ノ如ク改ム

地方長官ハ前項ノ報告ヲ受ケタル時ハ之ヲ取纏メ其年六月限り文部大臣

ニ報告スベシ

會 告

○寄贈及交換書目

(十月廿九日迄領收之分)

東京醫事新誌	一三六、一三四、五六七八九七〇、 一、二、三四五六七八九八〇、	全	局
研瑤會雜誌	六〇、	長崎醫學專門學校全會	
醫學中央雜誌	一六七、七八九、一〇、 四八六七八八九〇、一、二、三四五、 六七八九〇〇、一、二、三四、	全	社
日本醫事週報	五三四、五六七八九三〇、一、三四四、 五六七八九四〇、	全	社
醫海時報	五〇、三四五六七八九、一〇、二、三、四五、 五、六七八九四〇、	全	社
藥石新報	九七八、九一〇〇、	藝備醫學會	
藝備醫事	七七八、八九〇、	發行所	
日本助產婦新報	六、七七八九、一〇、	全	會
產科婦人科學雜誌	六、七七八九、一〇、	岡山醫學專門學校全會	
校友會雜誌	三、	全	會
國家醫學會雜誌	二〇六、七八九、一〇、	全	會
中外醫事新報	五、二、三四五六七八九、九〇、	全	社
北辰會雜誌	三、	第四高等學校全會	
植物學雜誌	一八〇、二〇七八九、	東京植物學會	
東京醫學會雜誌	一八〇、一、二、三四五六七八九、	全	會
醫事新聞	六、四、五、六、七、八、九、七〇、	全	社
廣島衛生醫事月報	六、六、七、八、九、七〇、	全	社

助産ノ栞	九七八、九一〇〇、	緒方助産婦會
順天堂醫事研究會雜誌	三七八、九八〇、	全
大日本私立衛生會雜誌	二五三、四五六、	全
藥學雜誌	二三八、九七〇、	日本藥學會
北越醫學會々報	一四二、三、	全
好生館醫事研究會雜誌	一、二、三、	全
日本眼科學會雜誌	八〇、六七八、九、	全
衛生談話	四〇、二、三、	通俗衛生茶話會
治療新報	二六、九三〇、	全
神經學雜誌	三、四五六、七、	日本神經學會
東北醫學會々報	三、	仙臺醫學專門學校全會
校友會雜誌	三、	京都府立醫學專門學校全會
產婆學雜誌	五、六七八、	日本產婆學協會
校友會雜誌	三、	石川縣立第三中學校全會
球陽	一、三、	沖繩縣立中學校學友會
中央醫學會雜誌	五、	中央醫學會
岡山醫學會雜誌	一七三、四五六、	全
大日本耳鼻咽喉科會々報	一〇〇、三、四	全
齒學研鑽	五、	富安齒科治療所
公衆醫事	七、	全
校友會雜誌	二、	千葉醫學專門學校全會
校友會雜誌	三、	三重縣立第二中學校全會

獨佛英最新醫學月報	五、六	全	社
臺灣醫學會雜誌	三、三、五	全	會
醫談	九、四、五	全	發行所
北海醫學	四ノ四	全	北辰病院研究會
京都醫學會雜誌	一ノ二	全	東京開成中學校全會
校友會雜誌	三、五	全	成醫會月報
成醫會月報	二、六、七、〇	全	躬行會叢誌
躬行會叢誌	一、六、七	全	中婦人科學雜誌
中婦人科學雜誌	二ノ二	全	學士會月報
學士會月報	一、九、	全	臺灣醫學會雜誌
臺灣醫學會雜誌	二、四	全	皮膚科及泌尿器科雜誌
皮膚科及泌尿器科雜誌	四ノ三及四	全	靜岡山縣醫學會々々報
靜岡山縣醫學會々々報	一〇	全	藥業新報
藥業新報	一、二	全	人體解剖學
人體解剖學	第四卷	一冊	醫學化學
醫學化學	一冊	全	法醫學圖譜
法醫學圖譜	一冊	全	增實用法醫學
增實用法醫學	一冊	全	簡明法醫學
簡明法醫學	一冊	全	增訂新纂外科各論
增訂新纂外科各論	后篇一冊 上卷一冊	全	ホドキン氏病及其肉腫トノ關係
ホドキン氏病及其肉腫トノ關係	一冊	全	山碕幹君
山碕幹君	一冊	全	下平用彩君
下平用彩君	一冊	全	石川喜直君
石川喜直君	一冊	全	雜誌部
雜誌部	(同窓懇親會 ヨリ寄贈)	全	雜誌
雜誌	一冊	全	結節狀増殖ヲ有スル肝臟ノ變形
結節狀増殖ヲ有スル肝臟ノ變形	一冊	全	

○十全會々費領收

(明治三十七年十月廿七日迄)

金參圓	(自三十六年度三ヶ年分)	林良吉君
金壹圓	(三十六年度二ヶ年分)	崎達郎君
金貳圓	(自三十四年度二ヶ年分)	八牧政孝君
金參圓	(自三十五年度三ヶ年分)	橘三丸君
金參圓	(自三十六年度三ヶ年分)	松田研吉君
金參圓	(自三十七年度三ヶ年分)	松田數男君
金貳圓	(自三十四年度八ヶ年分)	田代保二君
金貳圓	(自三十五年度二ヶ年分)	河野勇君
金貳圓	(自三十六年度二ヶ年分)	渡邊十治君
金貳圓	(自三十七年度二ヶ年分)	生沼曹六君
金壹圓	(自三十六年度五ヶ年分)	武田久米藏君
金參圓	(自三十六年度三ヶ年分)	高橋半也君

○報國の一端として本年三月より六月に至る本校軍資献金は全く納附手續きを終り本縣該當局者より各級總代諸氏に對し感謝狀を下賜せられたり吾人は別項に於てその全文を掲げ一覽の榮を請いしも更に芳名を列記して紀念とす

醫學科第四年級

- 小原芳雄 林 篤 池田恒太郎 下村義三郎
- 朝倉重敏 佐藤 潮 山本幹雄 松山 俊夫

醫學科第三年級

中西吉郎	阿部可一	種子田秀吉	小原德太郎
久保襄一郎	前田匡俊	江藤潤一	井上只次
廣場敦貴	江崎恒人	岡田剛平	伊藤善之助
森田信雄	釜口長助	辻一次	中村惠
關啓二郎	溝口美代志	高島二三	伊藤禮二
佐野愛二	水谷藤二郎	阿部時雄	後藤義賢
若林岱抱	猪木彦輔	永井學造	富家久男
柳澤長藏	濱地藤太郎	原清八	菊地文岱
若尾隆吉	綾部讓	山田周民	手束正胤
福山可藏	柳瀬恒作	中島誠	山田虎一
本濃觀藏	三股梅吉	手塚泰	中條俊夫
速水昇	河合忠次	高伊三郎	酒井利勝
水上湊	前野七郎	石橋四郎	仙波昌秋
林豐丈	計見雄藏	伊藤顯德	三井正道
青木正枝	松村四郎	上野忠	
建部鈴二郎	谷澤一郎	近森村主	草野佐一郎
中村德藏	渡邊彊	正木美登	齊藤傳平
牛塚榮太郎	近藤勇記	笹田順二	久保田保二
田村圓四郎	中野源一	長谷真吾	中西島吉
熊西中藏	中川喜平	山下銀吾	山内兔毛
城起吾老	來間隆次	河野益躬	島村伊之助
水上俊三	佐々木純一郎	小椋正香	龜井權六
庄司正義	英軒二	高橋重二	井上啓二
鷺山謙吉	福岡捨雄	千田常外	尾崎平吉
成田成治	秦親真	安田三木	四倉重篤

醫學科第二年級

松尾等	高橋幸七郎	淺利義治	三崎吉太郎
津田作平	折口靜一	松井源長	田邊傳六
金原鐵太郎	岡村俊照	金子政二郎	窪美一久
彦坂誠一	芦澤孝治	西村順八	藤村敬一
成澤輝一	甘利昇	江守武	森舜司
江村正也	杉本恒治	安積鼎	上田茂
小泉永宜	長井運男	山田伊之助	村尾純胃
中須熊藏	須貝璋太郎	吉村一馬	坂本信一
森公平	岩崎勝治	小町環	長澤安弘
丹羽佐忠	藤田藤右衛門	加藤慧治郎	熊崎直
勝股享	松本文二	羽田公太郎	高橋八郎
金六圓	平原雲新		
柴原外男	丹羽直	平泉泰雄	松原左武郎
影山清美	月谷慈一	内海友七	今井七兵衛
菅野萬平	秋山八百藏	松山清	江藤幹
下條正夫	村山政治	近藤琢磨	杉部多米吉
黒木隆	屋富祖德次郎	芦澤昭	村山貞次
樋口平治	村山常三郎	島田義一	青木市次郎
吉野要	木谷義太郎	久我龜	野村敏
小高御四郎	山内馨二郎	松原氏猷	高坂喜文
石橋三也	秋野定吉	岩佐兵藏	洲崎歸一
戸井源吾	馬淵眞澄	山田章一郎	山本幸吉
桑島柳吉	小出貞四郎	北川光雄	森義作
青山寛三	足立諒	松久祐馬	本城熊三郎
眞田幸平	石坂眞二郎	西村政吉	村本淳吉

醫學科第一年級

岡 忠治	藤井保二	渡邊復竹	神岡藤一郎
池川周次郎	丸谷巖二郎	淺井茂雄	城石健治
藤井 茂	山口 榮	原 久雄	塚原千津馬
小野林利一	武内 郎三	吉尾 開道	津田 眞吉
西 正胤	澤田 辰造	柴田 順三	中谷 正範
吉武 安男	吉川 孝作	千秋 了	織田 秀時
福田 四郎	龍田 恭齊	米澤 知造	小田 利吉
高氣 勇太郎	堀口 眞太郎	橋内 兵治	松崎 源次郎
石川 壽人	長村 義一	渡邊 常三郎	深瀬 陸郎
中島 正一	竹内 義一郎	並河 正雄	丹羽 玄純
岩崎 類吉	郷 茂樹	横山 鼎	田中 義雄
宮川 蕭	松江 鐵五郎		
小黒 仁太郎	高野 宗重	藤井 一雄	遠山 正輝
山村 鋤二	長村 吉太	猪飼 善助	玉森 法靈
林 秀雄	須貝 猪次	若林 篤之	高井 魯一
塚崎 茂	谷道 清	不破 才三郎	池部 正鑿
西村 銀太郎	長田 八三郎	深澤 治三郎	佐口 榮
武波 峯吉	田中 基保	永井 人雄	高木 琢磨
坪井 芳五郎	山川 宮三	島田 義一	内田 貞春
吉田 宗一	老川 雪房	伊坂 春	若林 古福
小林 唯四郎	若山 成二郎	松本 常次	坪内 幸三郎
箕 連橋	西 宇忠太	太田 勘市	朝日 昊
塚本 富彦	佐藤 武	岡田 秀造	川崎 汎三
濱田 眞鉦	橋本 正次	稻川 直	千葉 茂
諸橋 林太郎	吉田 繁次郎	布村 祥	原田 悦五郎

醫學科第二年級

市川 久多	山田 茂樹	赤尾 肇三	中村 欣一郎
田邊 俊之	池田 茂	白井 丈吉	額 又太郎
鷹見 義郎	武藤 匡一	増井 榮太郎	淺田 耕造
池谷 運平	白井 濟	原 季	林田 信平
野村 義雄	林 可一	佐藤 祐造	渡邊 關重
桑原 益方	佐伯 有吉	黒田 道純	伴 鐸也
平澤 嘉圓	五井 康平	水口 順	橋爪 元吉
仙場 松齊	山田 外來雄	志田 主税	竹中 徹
乾 佐平	河野 遺瑞	瀧澤 武藏	古屋 榮治
柿澤 雅一	萩原 卯太郎	天野 長重	岡 忍
宇野 正	玉井 七次郎	植木 信親	佐々木 靜
渡嘉敷 唯績	木村 松三郎	今村 文碩	武森 秀一
庄司 醇吉	岩崎 衷藏	春日 望	

醫學科第三年級

柳澤 秀吉	白井 順太郎	熊野 勉造	伊藤 昌平
寺田 久一郎	大柳 秀松	村澤 金廣	森 茂
福田 靜			

醫學科第一年級

金岡 清彦	津垣 直吉	井上 康治	新名 蓋
奥野 源治	吉野 新八	川勝 良造	小林 吉五郎
吉田 豐馬	山脇 熊人	久田 德	牛塚 甚之助

高野友衛 稻田 謹 大河内忠三 河崎 正雄
木村 和義

○本校軍資献金に對し其筋よりの感狀を左に記す

醫學專門學校

醫學科第四年級生徒

小原芳雄外六十六名惣代

林 篤

一金拾參圓五拾錢

右軍事費補足ノ趣旨ヲ以テ献金ノ義被聞届候事

明治三十七年八月三日

石川縣知事正四位勳三等村上義雄 叩

醫學專門學校

醫學科第三年級生徒

建部鈴次郎外八十五名惣代

吉 池 省 吾

一金貳拾參圓

右全文

醫學專門學校

醫學科第二年級生徒

柴原外男外百十七名惣代

一金貳拾參圓六拾錢

右全文

醫學專門學校

醫學科第一年級生徒

高野宗重外百二名惣代

杉部 多米 吉

小 黑 仁 太 郎

一金貳拾圓六拾錢

右全文

醫學專門學校

醫學科第三年級生徒

白井順太郎外八名惣代

柳 澤 秀 吉

一金壹圓八拾錢

右全文

醫學專門學校

醫學科第二年級生徒

西澤寛次郎外九名

川 勝 寛 三

一金貳圓

右全文

醫學專門學校
藥學科第一年級生徒
津垣直吉外十六名

金岡清彦

一金參圓貳拾五錢
右全文

原稿締切廣告

次號ノ切は來らん十一月十日と
定め回曆元旦面目を改め大に正新の意
を盡して刊行すること、せん、會員諸
君!! 流麗たる艶腕を振ふて續々御投稿
あらんことを冀ふ

十一月八日

十全會雜誌部編輯局

Abkühlung.

Maler : „Sehen Sie, dieses Bild ist von allem, die ich bisher malte, mein gerungenste!“

Kritiker : „Nun, um, — lassen Sie sich dadurch nur nicht entmutigen!“

Ein Schlauberger.

Reisender : „Wie komme ich denn von hier nach Wohlhausen?“ —

Her : „Sehen Sie in's Hotel „Krone“ dort; der Wirth ist sehr bekannt in der Umgegend, und kann Ihnen über Alles Auskunft geben!“

Reisender (im Hotel „Krone,“ nach der Tafel fragte zum Zimmermädchen) : „Kann ich den Wirth sprechen?“

Zimmermädchen : „Werde ihn gleich rufen!“

Reisender (zum Wirth) : „Aber Sie sind ja der Herr, den ich vorhin unten frug!“

Wirth : „Jawohl, der bin ich!.....Nun will ich Ihnen auch gewünschte Auskunft geben!“



廣告

小西前講師紀念品贈呈決算報告

入金總計金九圓八拾五錢也

內譯

金五拾五錢

金四圓

金五圓參拾錢

出金總計金九圓八拾二錢五厘也

內譯

金九圓八拾錢

金貳錢五厘

殘金貳錢五厘也

右之通ニ有之候也

明治卅七年六月九日

右取扱者 佐々木 純一郎
全 谷澤 一郎

醫學科四年級林 君ヨリ受取ル

全 二年級芝原君ヨリ受取ル

全 三年級佐々木谷澤受取ル

銀側懷中時計磁針器各一個及ビ

時計用腕卷革一筋代

捧書紙水引代

●第廿一回産科婦人科

學講習

科目 産科手術學及婦人科

診斷學

時日 十月十五日ヨリ十一

月廿三日マテ自午後

一時至三時

資格 醫術開業免許所有者

右廣告ス

規則書御望ミノ人ハ郵稅御送りノ

東京市日本橋區濱町三丁目七番地

産科婦人科楠田病院教室

出版廣告

故長與專齋先生遺著 全壹册既刊

松香私志

正價金四拾錢
郵税金四錢

(洋裝菊判二百頁肖像筆蹟及瑩城の寫眞入)

本書は長與專齋翁の遺著にして曾て孝嗣醫學博士稱吉君が出版されしものなるか今回更に同君より其版權を寄附せられたるに依り當文庫より再版に附することゝなれり

翁が終生本邦の醫務衛生の事に就て苦心焦慮以て其一生面を開き大に世を益せられたるは普ねく世人の知る所なり本書の名私志と云ふと雖も其實本邦の衛生小史と謂つべきなり且此再版には翁の肖像親筆及其瑩城の一紙をも併せ掲げたり希望の諸君は當文庫へ申込まるへし

但御申込の節は必ず前金御送付の事

東京市京橋區宗十郎町七番地

大日本私立衛生會内(電話新橋二七四)

長與衛生文庫

三共商店藥品部

發賣目錄表

タカヂアスターゼ	粉末 二八グラム入
タカヂアスターゼ	錠劑 (〇、一四) 參拾個入
タカヂアスターゼ	錠劑 (〇、一四) 百 個入
タカヂアスターゼ	強壯酒 八オンス入
鹽化アドリナリン	一千倍溶液 七、五グラム入
鹽化アドリナリン	一千倍溶液 一五、グラム入
鹽化アドリナリン	一千倍溶液 三〇、グラム入
クロレトイン	一オンス入
ビーフヂェリー	二オンス入
ビーフヂェリー	四オンス入
糖衣クレヲソイト丸	(〇、〇二五) 五百粒入
ペプシ子強壯酒	八オンス入
オイチモールクリーム	二オンス入
グリセリン坐藥	大人用 十二個入
グリセリン坐藥	小兒用 十二個入
アルミ製皮下注射器盒	二 號

齒科用注射器
其他パークデビス製藥會社製品數千種販賣致居候間御用命願上候



鷄卵製肝油乳劑	八オンス入
糖衣カスラサグラダ錠	(二)ゲレイン)百個入
オイチモール煉齒磨	二オンス入
グリセリン坐藥	大人用 六個入
グリセリン坐藥	小兒用 六個入
アルミ製皮下注射器盒	一 號
アルミ製皮下注射器盒	三 號

荏原中學校設立趣意書

凡ソ國運ノ發展ヲ計ラント欲セバ國家ノ中堅タルベキ人物ノ養成ニ努メザル可ラズ之ガ養成ニ努メント欲セバ高等ノ普通教育ヲ盛ニセザル可ラズ我國ニ於ケル此ノ種ノ教育ハ明治二十七八年ノ戰役以來遽ニ長足ノ歩武ヲ進メ公私立ノ中學校到ル處ニ設置セラレ生徒ノ充溢セザルモノナキヲ見ルハ洵ニ國家ノ慶事ト謂フベシ

然ルニ從來我が教育界ニ於テ最モ力ヲ盡シタル所ノモノハ初等ノ普通教育ニシテ高等ノ普通教育ニ至リテハ尙大ニ改良スベキ點少カラズ蓋シ從來高等ノ普通教育ハ動モスレバ純然タル專門教育ノ弊ニ陥リ教師ニハ概テ一科專門ノ人ヲ採用シ智識ノ注入ニ專ニシテ身體及ビ道義ノ修養ヲ忽ニシタル傾向ナシトセズ之ガ爲メニ卒業生ニシテ直ニ實務ニ當ラントスル者及ビ更ニ進ミテ專門ノ教育ヲ受ケントスル者ニシテ或ハ神經系統ノ疾患ニ罹リ或ハ呼吸消化器等ノ病症ヲ發シ或ハ素行修マラズシテ一身ヲ誤リ完全ナル發達ヲ遂グルコト能ハザルモノ少カラズ是等ハ固ヨリ種々ノ原因アルベシト雖モ苟モ教育ノ方法其ノ宜シキヲ得バ矯弊ノ目的ヲ達センコト敢テ難キニアラザルベシ

本會茲ニ見ル所アリ地ヲ東京府下武藏國荏原郡大井村ニトシテ荏原中學校舎ヲ建築シ本會長子爵加納久宜ヲ校長トシ理事寺田勇吉ヲ學監トシ理事高島平三郎ヲ教頭トシ聊カ本會ノ理想トスル高等ノ普通教育ヲ實施セントス大井村ノ地タル北ニ綠樹鬱葱タル一帯ノ丘陵ヲ負ヒ南ニ煙波洋々タル品川ノ海灣ヲ控ヘ冬暖ニ夏涼シク空氣清鮮風光明媚加フルニ東京市ヲ距ルコト數十町雷車アリ瀛車アリ交通極メテ便ニシテ衛生上ヨリ見ルモ訓育上ヨリ見ルモ青年ノ教育ニハ最モ適シタル所ナリトス而シテ我が校舎ハ即チ此ノ地ニ於テ最好良ナル位置ヲ占メタリ

本校ハ文部省令ニ依レル純然タル中學校ナリト雖モ其ノ教育ノ方法ハ本會ノ主義トスル體育ノ完備ヲ期シ之ニ基キテ訓練ヲ施シ之ニ基キテ教授ヲ爲スニ在リ抑モ教育ニシテ生徒ノ身體ヲ害センカ其ノ德如何ニ高シト雖モ其ノ智如何ニ明カナリト雖モ國家ヲ益セザルハ言ヲ待タズ一身ノ不幸之ヨリ大ナルハナシ況ンヤ道德モ智識モ

身體ノ修練ニ基カザレバ到底其ノ教育ヲ完ウスルコト能ハザル事實アルヲヤ故ニ本校ハ生徒ヲ教育シテ剛健ナル身體ヲ得シメ之ト共ニ堅固ナル德操明敏ナル智識ヲ具ヘシメントコトヲ目的トス

抑モ教育ノ首腦ハ教師ニアリ故ニ教育ノ効果如何ハ一ニ教師其ノ人ニ由ルサレバ本校ハ努メテ適任ノ教師ヲ舉グ以テ教授及ビ訓育ノ任ヲ盡サシメントス且ツ通學ニ便ナラザル子弟ノ爲メニハ或ハ寄宿寮ニ或ハ教師ノ私宅ニ或ハ公認寄宿所ニ止宿セシメ學校長ヲ始メ各擔任教師親シク生徒ヲ監督シ日常坐臥ノ間身ヲ以テ之ヲ率キ以テ父兄委託ノ重責ヲ完ウセンコトヲ期ス

本會ハ夙ニ體操學校ヲ設ケテ體操教員ヲ養成シ既ニ全國中等學校ニ奉職スル者數百名ノ多キニ及ビ尙ホ現ニ多數ノ學生ヲ養成セリ從ツテ體育上ノ智識及ビ經驗ニ富メルハ該校教師ノ特色ニシテ海内他ニ類例ヲ見ザルベシ本校ハ是等ノ教師ヲシテ生徒ノ體育ヲ擔任セシムルモノナレバ其ノ成績ノ善良ナルベキハ本會ノ確信スル所タリ抑モ邦人ノ體格ハ之ヲ歐米人ニ比シテ幾多ノ遜色アリ之ヲ改良スルノ必要ハ實ニ刻下ノ急務ナリトス本校ガ體育ニ重キヲ置ク所以ノモノ豈ニ偶然ナランヤ

今ヤ我が帝國ハ宇内ノ強國ト干戈ヲ交ヘ而モ戰ヘバ克チ攻ムレバ取り國光四海ニ輝キ武威寰宇ニ振フ此ノ無上ノ光榮ヲ維持シテ益々國運ノ隆昌ヲ圖ランコトハ實ニ國民ノ急務タリ本會モ亦千載一遇ノ昭代ニ遭遇シ聊カ國家ノ運ニ貢獻スル所アランコトヲ切望ス是レ本會ガ特ニ本校ヲ設立スル所以ナリ

東京府下武藏國荏原郡大井村

明治三十七年十月

日本體育會

(電話新橋三、三二一番)

緒方婦人科病院長ドクトル緒方正清先生著

再版

婦人科手術學

前編

菊判惣布美製本
七百七十餘頁
圖畫百二十餘挿入
正價金貳圓五拾錢
郵税金拾五錢

(後編印刷中)

本書第一板は幾歲月を経ずして望外の反響を婦人科學海に與へ絶板せり茲に於て弊舖先生に乞ひ先生更に自家の實驗説を基礎として現今歐洲婦人科の泰斗にして其學の深邃其識の該博世人の信奉せるヘーガル、カルテン、バツハ著婦人科手術學の新板に則り婦人科診斷法、藥物的治療法及分科的技術等最新術式は悉く網羅し遺す所なく實に錦上花を添ふものと云ふ可し加ふるに先生の立案正確文辭明晰圖畫精巧なる等其價值に至りては吾人の喋々を待たざるなり請ふ世の刀圭家諸士空しく改板の名のみに非ざる第二板の眞價を知り賜へ

發賣所

東京市日本橋區
通三丁目

大坂市心齋橋筋
博勞町

丸善株式會社

丸善株式會社支社

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要 (明治三十四年十月改正ス) 全文ハ本誌第廿號ニ在リ

- 一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ縁故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ縁故アル者ヲ贊助會員トス
- 本校職員及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス
- 一本會ニ講話部、雜誌部、遊技部、劍道部、柔道部及弓術部ノ六部ヲ置ク
- 一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス
- 本校職員タル特別會員(校内特別會員)ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス
- 本校卒業生タル特別會員(校外特別會員)ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年チ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス
- 將來卒業ノ特別會員ハ卒業ノ當時必ズ三ケ年分ノ會費金參圓ヲ納ムルノ義務アルモノトス
- 通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓五拾錢ヲ納ムベシ
- 一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌年八月ニ終ル
- 一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講演會ヲ開ク
- 一講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クアリ
- 一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ
- 雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス
- (運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス)

▲投稿心得七則▲

- 一投稿用紙ハ中折紙を用ひ必ず楷書たるべし殊ニ洋字ハ字體を明かに記入せらるべし
- 一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總テ没書トす
- 一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし
- 一言の政治に涉リ或は德義に背くものは一切登載せず
- 一未完の原稿は採録せず
- 一原稿採否の權は編輯長にあり
- 一二且寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治三十七年十一月九日印刷

明治三十七年十一月十二日發行

編輯兼發行者 石川縣金澤市廣坂通新道二十六番地 森島彦夫

印刷者 石川縣金澤市尾張町八十二番地 宇野孝太郎

印刷所 同所 活文堂

發行所 金澤醫學專門學校十全會

電話【六十五番】